川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年六月二十五日 印刷
昭和四十七年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五四二号

No. 542

二賞中間発表

七月号

えらばれ

みがきぬかれた　灘の酒

超特撰　日本盛

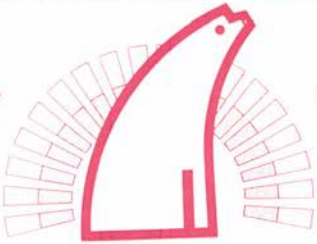
超特撰（化粧ケース入）一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒

日本盛

ニホンサカリ

灘　西宮酒造　醸



HORAI

551

蓬莱商品の目印

アイスキャンデー

あずき・メロン・パイン・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ　・　ミックス　・　チョコ

蓬莱

大　阪・なんば

《出張販売》高島屋　そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

時差の陽が燦々として午前二時

ジャンボ急げ孫が待ってるロスの灯だ

こんなとこで会話のおけいこ役に立ち

ロスの街迷うた馬鹿をたしなまれ

喜寿米寿ロスに句会の花稔る

中島生々庵

母の日

実は母を失ってから20年になるが、私にとって母の日の赤いカーネーションは毎年たまらない程寂しい色として目に映るのである。勿論赤いカーネーションをつけたお仁を倖せな方だと羨みこそすれ、決してねたむようなさもしい気持は微塵もあるわけでないが、忘れ得ない母の面影が殊更深く恋しくなって来て、一日中がうつろの日となって落ちつかぬからである。老妻を伴れて大阪の雑沓を逃げ出し当麻寺に曼荼羅と中将姫を拝みに行った年もあった程である。今年は偶然にもこの母の日をロスアンゼルスの次男の宅で迎え、その上現地では古い歴史を持つ、「つばめ川柳社」に招かれて選句選評をする機会を与えて頂く事になった。はるばる一万余キロの太平洋を一緒に渡って来た母の遺影を人知れず内ポケットにしっかり抱きながら、丁度晩年の母の年令位の女流川柳者が元気な姿で多数作句して居られるのを拝見すると又しても胸せまるものがあったはあったが、今迄に曾って経験しなかった明るい母の日を味わう事が出来たのはほんとうに嬉しい限りであった。

ロスにて主幹ご夫妻

座右の句

人生譜　柳は日々の風を見ず　（薫　風）

私の句

ふみ台になる倖せの重み知る

堀　江　正　朗

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

母の日……中島生々庵…（1）
路郎先生の思い出……北川春巣…（2）
川傍柳初篇研究…（百八）……前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唖三味・丸博美・藤井和雄十府・岡田甫
路郎というひと……東野大八…（24）
ロス柳人と会う……中島生々庵…（22）
「旅人」以後の麻生路郎作品…（18）……傍島静馬…（26）
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
近作柳樽……菊沢小松園選…（30）
一分間の柳論……工藤甲吉…（41）吉岡遁児…（59）
秀句鑑賞…（同人吟）……正本水客…（42）
近詠…（近作柳樽）……橘高薫風…（43）
川柳五十三次…（二十二）……諸家…（27）冨士野鞍馬…（44）

路郎先生の思い出

「川柳祭」のことども

北　川　春　巣

この月は路郎忌の月である。

路郎先生は昭和四十年七月七日、満七十七才のお誕生日を目前にしてなくなられた。先生のお誕生日は七月十日で、ご生前はこれを祝って、門下生が集り、その七月十日（またはその前後）に「川柳祭」の大会を行なっていた。

川柳祭は、昭和二十八年の先生の川柳生活五十周年を記念して、昭和二十九年に第一回が行なわれ、以後毎年行なわれて、昭和三十八年まで十回に亘った。以下毎回の路郎賞を獲得した句を列記してみよう。

（第一回）二九・七・一〇（題「誕生日」）
婿にする野心誕生日へ招き　一　善

（第二回）三〇・七・一〇（題「子沢山」）
子沢山使いにやったのを忘れ　水　客

（第三回）三一・七・八　（題「社　員」）
本店の平へ課長の如才なし　無　鬼

（第四回）三二・七・七（先生の古稀祝賀会を兼ねる）　（題「夫　婦」）
夫婦連れ車中は何も話さない　いわを

三味を弾く……高鷲亜鈍……(27)
二賞中間発表……香川酔々……(28)
むかし・むかし……本多柳志……(40)
きのう・きょう……橘高薫風……(41)
書評・甍の艶……不二田一三夫……(39)
七夕……(45)
ざつぴつ・しゆんじゆう……(46)
雅号ぶっちゃけばなし……水車・史好・三柳・村諷子・岳人……(47)
初歩教室……小林トメ子……(51)
大萬川柳「つつ抜け」……岡田拳法……(50)
柳界展望……本田恵二朗……(54)
本社六月句会……川村好郎選……(52)
各地柳壇……(薫風)……(56)
一路集……(庸佑)……(60)
「小口」……(文秋)……(48)
「看板」……恒松叮紅選……(48)
「疑う」……松本忠三選……(49)
編集後記……小幡里風選……(65)

座右の句

復員の蟻も驚く程背負い　（春巣）

私の句

新築の設備良くして維持費に困り

山田季賛

（第五回）三三・七・六　（題「仲良し」）
これ着ていきと仲良し服を脱ぎ　狂二
（第六回）三四・七・一二（題「親譲り」）
親の血が無事な男にしておかず　晃
（第七回）三五・五・一五（題「学生」）
まだ休みかと学生じやまがられ　東天紅
注…この年は、九月に誌寿四百号祝賀大会があったので、川柳祭は五月に行なわれた。
（第八回）三六・七・一六（題「気軽る」）
OKと気軽る終いを聞いていず　ひか平
（第九回）三七・七・八　（題「情熱」）
情熱が木石のようにもさせ　芙路
（第十回）三八・七・七　（題「先見」）
先生にあっさり私立すすめられ　正州

川柳祭の行事は第十回（昭和三十八年）で終止符を打ったが、翌三十九年には「川柳ゆかた会」と名称を変えて大会が行なわれた。「ゆかた会」は八月九日だった。第二回が四十年八月八日の予定だったが、その前に先生がご他界になったので中止された。

ここで特筆すべきは、川柳祭の路郎賞の句に、先生は句評を加えられたことである。その他の場合は、先生は選をされても、「天地人」そのものがすでに短い句評であるといわれて、特に句評を加えられることはなかった。「川柳祭」をいかに重視されていたかが分ろうというものである。

西尾栞選

香川県　三井酔夢

今を生きる牡丹の贅を見極める
牡丹植え晶子の性を盗みたし
愛欲の行く末みたり緋のぼたん
男には見せまじ牡丹散るさまは
余生など牡丹は知らぬいさぎよさ

大阪市　神谷凡九郎

死イコール零には人間なり切れず
浮世とか他山の石が多すぎる
今日もやっぱり暮れた秒針は返えらずに
人間の馬鹿さ加減が潤滑油
自己を知るそんなそんなのむつかしい

大阪市　天正千梢

何かを求め冷え込み痛くなり
聞かせるだけの布教如来に背をむける
絶対の大悲の前に凡夫なり
余韻豊かに魂まで救われる
切れかかったわらじ五十年履き続け

松江市　中川晃男

青春の弾力に堪えるスラックス
引込線がさびついてるドル・ショック
人を責めし舌よ今日はへつらう歯よ
定型の弔辞にやはり涙して
たかぶり覚めずラーメンすする

宝塚市　傍島静馬

急ぐわけじゃないがとやんわり当って見
よぼよぼになっても数字に強い人
親切を干渉呼ばわりするヤング
表札が読めず押売り素通りし
ミニスカート上から眺めるものでなし

神戸市　小濱牧人

ヒッピーの病めるこころを陽に曝らし

茶の友となって余生の睦じい
弱点のない弱点に気がつかず
五月の童話へかぶる兜を折ってやる

川端康成を悼み

踊り子と伊豆の別れが永久となり

高槻市　若柳潮花

窓閉めて女旅装の襟を拭き
あじさいにのぞかれそうに窓を閉め
燃えつきた女のように牡丹散る
塗り笠へ江戸むらさきの藤の花
女形揚幕までの裾をあげ

堺市　吉田圭井堂

初鮎を掛けて今年を意識する
雪解けの渓で孤独の綸を垂れ
見解の相違と我が児捨てて来る
事件起きるまで評論家は眠り
這入るなり冷戦だなと靴脱がず

出雲市　尼緑之助

お月さんを見ろ問題にせぬアポロ
むなしさは他人(ひと)をけなして飲んだお茶
遠蛙酒精は遅々として回転
新緑のにおい人生有情夜の酒
夜の調べにピーポーピーポー猫の恋

大阪市　橘高薫風

路郎の忌　瞋恚近づき遠ざかる
路郎の忌　酒債なければ詩債なし
少年の幾人いても毬一つ
灯台よ牛乳壜に乳充てる
恋人がいま肉眼に入り来る

岡山県　浜田久米雄

ご自愛を祈るとみなが言うてくれ
暑ければ脱ぎ寒ければ着て達者
有為転変明治生まれに烈しすぎ
十センチぐらいのことで事故に遭い
四年樽がことしも三つ転がされ

倉敷市　本田恵二朗

静けさと遊ぶ楽しさ見つけたり
はよ来ぬと散るぞとなぐり書きが来る
現実はきびし遍路も黄帽子
知らぬ振りするほど深い仲であり
島かげの恋を小蟹に見つけられ

尼崎市　黒川紫香

花追うて散り際ばかり見て廻り
昔居た借家で少し雨宿り
犬好きの顔と見てとる犬が居り
都会また道路工事につき当り
ぐっと松伸びて旧家と云う構え

大阪市　正本水客

津和野にて

鯉のいる街に歴史が溶けている

春風秋雨のれんの宿のつわぶき煮
切支丹流罪の地に青野山ははのごと
マリア聖堂　乙女峠は花ちるばかり
悲恋の椿ひとつ出羽守の墓寂と

倉敷市　臼井三林坊

朝日など喫い銀行の茶をよばれ
ヘルニアの男ポルノを読みふけり
追い抜いて母を振り向く二の鳥居
登記所へ男まさりの顔で行く
大毎もやけに社員の肩をもち

大阪市　山川阿茶

写経して脳細胞のクリーニング
朝詣り邪心みどりに洗われる
入院の子の鯉幟威勢よく
花びらがトウダンスする花吹雪
ブランコで沈思黙考さくら散る

大阪市　西出一栄

愚痴のんでえんどう飯で押えとき
さつき咲く丹精だけの花が咲く
矢車のリズムに鯉は生きている
新緑が好きで箕面の馬車に揺れ
筍の序に長岡天神拝まれる

竹原市　森井菁居

風の私語かすかに悔いをよびさまし
レース編む女の無我を破るまじ
いのち断てない奇形魚の如くいる
愛憎の渦他人様に見えぬ渦
酔い痴れて知る安らぎを不幸とも

倉敷市　本田八笑人

捨て犬が仲間外れの子になつく
樹に登る恋は枯葉の舞う如く
青空がのぞく税務署出たとこで

心の会柳画展に（一句）

水茎の素朴に触れるしじまかな

服部金太郎君自著出版に

泣き笑い十年男の意地が美しい

松江市　小林孤呂二

新沖縄県誕生（一句）

晴れの日へ基地の騒音消えぬまま
老犬のさびし飼主に呼ばれぬ日
人生へただ変らないもの寝相
背広をとおす五月の風に歩がすすみ
三人の子あり三等分の愛しめす

倉敷市　小野克枝

戻れない道新しい靴を買う
人形の首を抜きたい反抗期
表には出さぬ敵意のかくし場所
武器の無い女で九官鳥が好き
元気です三分間の嬉しさよ

大阪市　河野君子

陽に向いて干場の主婦のよく動き
ためらわず嘘が云えそうサングラス
妥協するからにはいっそ笑ろて見せ
簞笥の中で私の浴衣が派手になり
リズムには乗れぬ私の脈の音

大阪市　小出智子

金魚売りの声聞く街に住み馴れて
雨だれの惰性に似たるわがくらし
母の日も母は静かにものを縫う
春愁の膝に重たき夏みかん
子の好きなものを夫に詫びる膳

米子市　林瑞枝

つまずきの底から青い空が見え
事故に逢い今日の試錬の日誌閉ず
踏み切れぬ分別ふたりの平行線
チャンス今人生のバスに乗る思案
忘れ得ぬことへ周囲が気を遣い

岡山市　川端柳子

愛情の打診へ一輪ざしがゆれ
目立たない位置で捉える父の視野
一〇〇点をつけたい人がうしろ向く
持ち味をそのまま着付教師とか
派手好きでないが若さのほしい今日

笠岡市　木山遠二

悠悠自適職業欄は農と書く
汚さねば空気はうまいものと知る
深呼吸の向いてる方は東なり
年寄の生甲斐床柱へ凭れ
善人と見られぼんくらとも見られ

貝塚市　野坂つき子

やっかいな恋のかけ橋たのまれる
ドラマ終れば現実が迫るだけ
女泣かせただけで恋ザ・エンド
妹の恋取りついだ受話器置き
逢いに行く日の紅の彩燃えている

京都市　都倉求芽

新緑の候　古刹甦る
後攻めのペース逆転もなく定退
カーラッシュ雨の舗道に唄がなし
ワンマンカー変なとこから喋り出し
地下の川十階の車庫都会病む

青森市　工藤甲吉

わさび漬ぶらぶらしてる身にこたえ
我が道を蟹はあくまで横に這い
俺のようなものが蒔いても種は生え
痴話喧嘩までピーポーは走らされ
女房の里もだんだん遠くなり

倉敷市　水粉千翁

富士山の雲一片に極まれり
母をさす指から知恵がのびてゆき

貧しさの云えぬたのしみばかりなり
芸に泣く涙流れるまでになり
ハンカチの白い折目にひそむ妻

米子市　八木千代

初孫の手相ふしぎに吾れに似て
巣立せた子の巣づくりへむきになり
さりげなく見守り母の灯も消えず
譲られていてラッキーと思いこみ
六月の窓に秘密を脱ぎかける

島根県　小砂白汀

ステンレススチール錆びたく思う日も
透明なガラスに思考力がなし
音もなく降る雨葉末にたまる
郷愁のごと陽ぶくれのフトン抱く
風受けて廻るほかなし風ぐるま

大阪市　有信新之助

飲みにきた父子眼鏡をかけている
女権論ぶつほど男にめぐまれず
売店の雨戸シーズンオフの色
この人なら解ってもらえる齢になり
めずらしい乞食のリンへだす小銭

島根県　堀江正朗

そっと座を外し音から遠ざかる
感にぶる動きを妻に労られ
感のよさなど賞められた日を追うて
妻のぐち結局見えぬことに触れ
湯がたぎる魚が焦げる動けない

和歌山市　垂井葵水

ビラを貼り終ってビラに振返えり
骨のある筈がお酒に溶けはじめ
地下街を出て夕焼につきあたる
変身を齢が許さぬ道にいる
棕櫚の花こぼれ会話の拙しくて

大阪市　本多柳志

気がつけばもう老醜のちゃんちゃんこ
雨の駅もう老妻も傘も来ず
くん酒山門に入るを許してよく稼ぎ
一寸の虫が会議の席を立ち
沖縄はどうでも大赦待ちこがれ

八尾市　香川酔々

絵馬堂の闇を小さな絵馬走る
天平の星が輝く石舞台
赤旗を立てて私駅の虚脱感
麦踏んである一生を人つくる
花を買う花の心も買いたくて

倉敷市　野田素身郎

帰らねば心配一日居れば邪魔
四十歳日曜日の雨有難し
飲めもせぬ酒を飲む夜が続く地位
管理職になり連休が楽しめず

情熱という言葉も遠いものになり

富田林市　岩田美代

春のスト私にかかげるハタがない
美しい嘘で変身の彩をより
言い切ってからの迷い多すぎる
決断のなさ女としてふり返り
葉桜や喪服に絆まといつき

大阪市　室谷徹舟

義理欠いたお詫びが後で高くつき
九十才大往生へ孫揃う
御冗談ばかりとうまく逃げられる
超ミニへうっかり階段はずすとこ
足跡を眺めて孤独顧る

倉敷市　藤井春日

生き抜かん拳は汗に濡れている
ランドセルお手手つないで春を駈け
駅弁をつついて家出の太かい夢
口吻を待って燃えてのシクラメン
金貯めて仁礼信に遠くいる

豊中市　戸田古方

機密やてどこのどなたが決めはった
そやかて僕の月にはあの兎
一流だとさ取巻ひとりまた殖える
今買うた定期だ大きい顔をして
何の音かと思たら竹刀ふっていた

香川県　岡田拳法

危機予測なんとかなろうには勝てず
未知につく勇気少なく折曲り
なるようになれとしばらくだけ思い
制約の外へ顔だけ出して見る
お告げまで同じで提案見直され

門真市　福島鉄児

対座して相手の出方待つつもり
男靴並べて留守の家守る
マイカー持って玄関狭う住み
生れくる孫へへそくり溜めておく
かき立てて見ても残り火は燃えず

鳥取市　河村日満

川端康成氏の自殺に（二句）

ペンここに終る京の美日本の美
老醜をさけたいこころ私にも

有福温泉にて（三句）

雨に閉じこもり有福不運がり
目に青葉雨の霽れ間の宿ゆかた
幕あがるように有福明けかかり

兵庫県　遠山可住

子のボールの強さ真顔になって受け
播き終えて五月雨となるあたたかさ
戦さ語れば生き生きと男の瞳
わが道を行く足音のひとりぼち

春崩ゆるこのすさまじきエネルギー
倉敷市　小幡里風

合格に酔う足許を見極める
ライバルの意識へルール組みかえる
偽りの盛装追いつめられている
献血の列できれいな虹を見る
雨の中ゆっくりすねている一人
堺市　藤井一二三

諦めておりますと愚痴まだ続き
サボテンの針が孤独を意識せず
置き薬二日酔用ばかり減り
感謝して欲しい子供へ口つぐむ
山陰大山の旅
開運の鐘凡生の慾が撞く
大阪市　大坂形水

駆け足世界一周
税関(羽田空港)を通ると日本でないロビー
べらぼうに昼間の長いヨーロッパ
ぞっとする処刑具遺るロンドン塔
やましさなどさらさらにないヌードショウ
土産物買うモーレツさ日本人
大阪市　不二田一三夫

回ってる時だけ立っている独楽(コマ)か
おとなにもPTAがあってほし
やがて遺品となる合本の数をよむ

寄席

寄席囃子ここでも食うか食われるか
芸人をみなアホにする寄席囃子
岸和田市　高橋操子

大工さんに愛犬少しなじんで来
目覚しの小鳥静かに朝をなく
思い切って薬を捨ててから達者
あばらやの太陽までも盗まれる
城陽市　大鶴喜由

白粉を一割ひかえ妻となる
なたね梅雨雲雀は雲の下で鳴く
ブルドーザーの如き男に愛をもやし
よう出来た嫁と半年程はほめ
高槻市　福田丁路

公害の国へ産声高らかに
保釈金何の苦もなく積み重ね
順法という迷惑なストライキ
最終の学歴予備校とも書けず
大阪市　福井野迷路

野放図なとこ見逃さぬカメラアイ
やそ路にて見残したりな夢の夢
酔いつぶれた格好のエチケット
コカコーラ恋の序曲を破裂させ
藤井寺市　西いわを

砂に水浸み込むように諭される

晴後曇り時々変る山の色
涙雨傘の雫と共に消え

川端康成自殺

遺書のない自殺と聞いてホッとする

下関市　国弘半休門

豚小屋の豚児を親が踏みたおし
断わりを言うのに無二の友がいり

日本の旅

魔女水を使って水を鳩にする
対馬路のお馬が通るとバス止まる

大阪市　木村水洞

柳生の里昔の静寂とりもどし
足るを知る境地に遠く通勤車
慾望が褪せて夫婦信じ合い
ブロックの塀で寄付の額がふえ

岡山県　直原七面山

歩巾を女に合わすのも恋
恋も血みどろ愛も血みどろ
指伝って流れ来る愛
強精剤を打って逢曳

宇部市　石川侃流洞

薬にもならず留任さすと決め
葉桜へラムネの泡のはぜる音
憂愁を長いまつげの中に置き
陽を吸うてフトンふんわり夢をくれ

伊丹市　小川静観堂

沖縄本土復帰

爆竹へ紅型（びんがた）の佳人仏桑花を抱く
美智子妃の御顔明日香の幻想
古墳ムード万葉の旅を盛りあげる
幻想の女性（にょしょう）へ一句ものが言え

呉市　林野甦光

美人いて客の回転はかどらず
竹割った気質を使う使いよう
我を通す男が老眼鏡覗く
重役の歩調が合わぬ曲り角

島根県　藤井明朗

レジャーを追うて足元見失ない
目に青葉フワイトがわく新入社
時計台見上げ騙されそうな予感
子を連れて里で甘える日を延ばし

大阪市　河井庸佑

妥協する素振りも見せず身構える
会議室ことりともせず無気味なり
平凡がいちばん良いと今わかり
赤電話待つ身に三分長すぎる

姫路市　隠岐不酔

出りや淋し　帰りや小言に　親も老け
古稀祝　僕にですかと　念をおし

世帯もち　出口を堅とう　錠おろし
仲人は　姑を神の　ようにほめ

大阪市　水谷竹荘

出世した金が噂を作りあげ
花鋏花壇の花に迷わされ
考古学ブームあちこち穴をほり
成功した方が再会待ちこがれ

岡山市　光好陽子

幸せは孫や娘に酷使され
公害はどこ吹く風か鯉のぼり
三十年表彰台がまぶしすぎ
アイリスのむらさき慕情を断ちきれず

愛媛県　渡辺暁童

義理すてぬ人素うどんを中にして
ほめ言葉他にないのかお元気な
退職後ネクタイにさえ希望なく
おいつおわれつ筍ののび

松江市　岡崎祥月

設計図三度目我が家まだ建たず
不甲斐ない俺に歩調を合わす妻
しあわせの中でもやはり愚痴は愚痴
見栄のない妻で平和な灯をまもる

京都市　松川杜的

盆栽をアップに御所の春写つす
眼を閉じて開いて緑の中に座す
手をつなぐそのど真中を抜けたろか
迷い路竹の青さに笑われる

今治市　越智一水

つばくろへ戸開けて行く花の留守
心からつぽ肌だけ女よくみがき
帯の彩見るに絵筆をとめさされ
やわらかい葉にやわらかい陽の光

大阪市　金井文秋

アンテナをひやひやさして鯉泳ぐ
花嫁と対話鏡もうれしい日
運命も変えるつもりの顔を変え
温室で花も季節にぼけてくる

大阪市　宮尾あいき

珍客へ一番鶏は遠慮せず
そよ風へ窓の造花は知らん顔
母にしか云えぬ耳打ち父が妬く

孫誕生

初声天を突いて鯉のぼり跳る

高槻市　山田季賛

家計簿の赤字引き算が多すぎる
保険屋の長尻にしてやられ
世話役が出来る身分をうらやまれ
コップ酒明日のプランを練り直し

大阪市　児島与呂志

とりあえずうどん進めて座のなごむ

一泊のせわしい旅にもある虚勢
パートする妻に済まない電話番
平凡な平凡に今日暮れていく

青森市　織田可津春

海女踊る乳房にも似て珊瑚しよう
残業のふと手の筋をみておもう
決方の日々へ出来てくプラモデル
人形をつくり信じている女患

兵庫県　河原みのる

プロレスが血を流すのもショーのうち
この先きが知りたい俺のプログラム
おかまいなくおかまいなくと去にもせで
国道と知ってか毛虫脚ばやな

大阪市　今西章雅

三猿主義でいきなはれやと送り出し
経済誌あさって株ですっている
ストレスとギャンブル結ぶ時代相
方便のウソ大臣も仏弟子か

大阪市　藤田軒太楼

大半は従いてながれた拍手です
春三番不況へ追打ちかけて去に
寄進する方が敬々しくも頭下げ
頂点に立って知り得た孤独感

東大阪市　竹中綾女

優勝馬騎手に手柄を持ち去られ
新建材に罪を負わした火事の跡
母の日に母を奪った火を呪う
記念にと拾った石の重くなり

美祢市　安平次弘道

珍しい姓先祖を話題にされ
赤軍派以来父子の対話ふえ
男になった子を妻もてあまし
スト知らぬ蟻をうらやむ経営者

大阪市　江城修史

言いふらす女がいつも美しい
底辺に生きて孤高の名を貫い
ひとの訃にこだわる齢よ吾れ初老
薬さえも掴めぬ果てのコップ酒

大阪市　黒田真砂

ぎりぎりで妥協やっぱり夫を立て
想い出は小雨の窓へ逃げて行き
妻と言う名は枷心は縛られず

店舗改装

二Fへ続く絨毯そっと踏み

岡山県　出原敬一

亡きがらに義足はかせて旅立たせ
新妻はネオンに負けぬ身の飾り
袖垣にからんで今朝の二三輪
横着者を起しに帰る農繁期

泉佐野市　阿万万的

若葉のまぶしさに眼を細めてる島の墓地

平家落人の里を訪ねて

落人の残り火軍雞飼う農家
落人の里石ぼとけさえひそといる
筍掘り土の匂いが手に残る

守口市　村田瓢太

猫も杓子も中国言わねば損のよう
出不精が造幣局で間に合わせ
隈取りを落とせば現代に生きる顔
ご機嫌のよい間だけ孫を借り

芦屋市　丸川初甫

恩師訪う萩の寺から廻り道
一番星へチャルメラの笛が冴え
ラーメンをおごって貰う頭出し
気持よい音でぼろ布紐にさき

西宮市　島居百酒

瓜の蔓ながら息子に期待かけ
確信があって微笑で応えとき
蓮池の亀も座禅の構えなり

島根県観桜川柳句会に出席

散り残る桜の土堤に酌む余情

鳥取県　清水一保

秀才と馬鹿の間でつつがなし
声張ってつばめの喧嘩へ割って入り
物想う場を五月雨に支えられ

九回の裏有り人生夢を抱き

尼崎市　高津徹也

七三に話を交す親会社
猟銃の焦点畜生の嗚呼
更衣平凡でない日がうれし
直立に日傘を持ちて夏の昼

岡山県　池田古心

親樹殺して宿り木の自滅
よく降るとほめれば雨降り調子づき
散歩する犬が退職金を連れ
尊敬をする聖徳太子振り向かず

松江市　恒松町紅

一週間の埃を掃いて共稼ぎ
海峡は本土へつづく空と水
潮鳴りも聞いて港は平和な灯
壇家とは別に有料駐車場

大阪市　西川誓二

盛り場にストリップもある城下町
スンナリと謎にかかった面憎さ
本心は知る由もなく媚態に負け
追伸に親の甘さを見てしまい

今治市　小笠原有里

覗かせぬ女心を寡婦はもち
噂ずき波紋よろこぶ枝葉つけ
亡き母の迷信好きが身にそまり

むらさきの炎不倫の恋に燃え
広島県　高橋鬼焼

肩書を見せまい酒がにがくなり
ヘルメット働く汗が今日も染み
謎めいた言葉心でチェックする
人形へ聞かせたくない一人言
神戸市　仲どんたく

対岸を消して浜名湖菜種梅雨　館山寺一泊
陽光が飛鳥美人へまぶしくて
オールドブラックジョー歌えば我が身のことかとも
総括をされそうほろ酔門叩く
岸和田市　葛城伊三郎

官民が一途にならず国が惓み
沖縄復帰ドルに揺れデモに揺れ
墓参りしたを自慢に云うて去に
洗濯物干すにも女の上手下手
堺市　伏見茂美

二度手間を笑うて自分も忘れとり
鯉のぼり親子二代の風を呑み
酒という友あり寡婦の一人言
初夏らしく仏花の中にあやめかな
鳥取県　森田布堂

献血も出来ず貧血症でいる
黒板の先生ふとパチンコを思い
マフラーに似たネクタイの巾となり
不景気の前売券が売れ残り
兵庫県　大江秋月

対話する息子の知識伸びすぎる
終電はだました女も降りて来る
満員車少ない酸素分けて吸い
帰宅する足は階段二つ飛び
倉敷市　谷井扇水

打開策なく合鍵が錆びていく
仲間からはみ出た者にも椅子はある
水中花土の温くみは知らず咲き
親の見栄子の本能をぐらつかせ
富田林市　板尾岳人

何故山に登る愚問に目をそらす
全身に山の空気をもち帰る
登山靴永く倖せ踏んだ峰
孫の手を引いても山へ行くつもり
愛知県　大谷月都

若き日の待合場所に立ってみる
隣りとの境界線に草が生え
雨上り提灯だけのビヤガーデン
父親は孤独なものと子も思い
愛媛県　村上旭童

酒好きと見たか律義についてくれ
農きびし女は酒を飲みならい
夜の道だから女がついて来る

死ぬよりはましかも知れぬ歩道橋
平田市　久家代仕男

妻として委細洩れなく知る権利
漁婦の手間マイクロバスで迎えに来
迷惑なものに公害地区指定
草原の牛は公害など知らず
倉吉市　奥谷弘朗

引越しへ後髪引く桜草
釘ひとつ打つにも大工の許可が要り
他人より悪い養子と見る哀れ
小さくても二人の城がやっと建ち
姫路市　村上春巳

折角の心ぶらセカセカ歩るかされ
おじいちゃん皆揃ろてます一周忌
鯉を飼う役目もあって発電所
元伍長守衛の挙手がよく似合い
東京都　増田次章

どの顔も大まじめなりラッシュアワー
善いことが一つだけあり今日終る
怪獣の氾濫戦争ゴッコの連想
いつからか来賓となり披露宴
倉敷市　竹内翁童

チャンス逃したグチを聞いてやり
夕凪の暑さにたえる吹きだまり
初節句未来へ続く日本晴

秒針に押されて朝の家を出る
桜井市　岩本雀踊子

子盛りを耐えた妻の白髪染
六十を生きぬく細き影法師
灰皿へ男の嘘がかけてくる
良心がゆるしてくれるほどの嘘
島根県　大森孝華

ふくろうのしきりに鳴いて過去に冴え
雑談に溶けて商魂ぬけ目なく
やわらかい言葉へキャンセルおさめられ
結局は我が手で元の座にもどし
大阪市　中川滋雀

飛鳥路へブームにのったペタル踏む
惜しげない拍手へビリは走らされ
待ちぼうけ余憤をレジに叩きつけ
左手の怪我はつめたく労われ
生駒市　草深酔升

春闘の記事がかき消す花だより
ゼネストへこれ見よがしの飛行雲
赤ちゃんをあやすしぐさで犬を抱き
アパートの屋根にデッカイ鯉のぼり
笠岡市　松本忠三

神妙に聞いてるだけの会議中
玄関の声が寝ついた孫へもれ
気晴しの散歩人混みに疲れ

合戦が遺してくれた観光地

和歌山市　野村太茂津

祈りにも似て孫の瞳と対話する
血統の証明孫の手孫の足
そのあとの空洞怖い娘の婚期
馥郁と咲いて鼓動は消えている

富田林市　木村弥栄子

巻き過ぎたネジへ心棒の折れた音
あきらめて愛のカケラを拾い上げ
釘曲る柱の節にある怒り
貸衣装過大包装して嫁ぎ

出雲市　原千太郎

老妻の歩巾へ合わす墓参道
触れるとこみな急所です女体です
酌ぎこぼすその動揺を見逃がさず
借りたのはど忘れ貸したのは覚え

小松市　馬場魚山

寡婦生きて行くに男の呼吸を混ぜ
雑草にまじり薬草よくふまれ
お見舞の客とも知らず犬がほえ
この家のことは狙だけが知り

鳥取県　谷無閑

組織との妥協も票を先によみ
花吹雪若い女患の日向ぼこ
花吹雪病む娘に窓をあけてやり

同姓同名の叙勲へフトあわて

堺市　高橋千万子

どの汽車に乗るのか美女が一人待ち
きれいすぎ妻の替玉思案する
すきな人脊丈合せるヒールぬぐ
腹の虫まだおさまらず一人言

守口市　羽原静歩

夫婦とは今日も化しあい労わりあい
王朝の悲劇へ古憤の瞳が笑い
脱ぎ慣れたモデルやっぱり風邪をひき
脈のない話へ素うどん伸びたまま

呉市　槙田英詩

責任を一人負う気の勇み足
エアポート脱日本の暇と金
試歩今日は杖を離している真顔
湯疲れのソファーに山の名を訊かれ

鳥取県　鈴木村諷子

老の身に早飯というエチケット
卑怯者三猿主義で行くという
鍬振れば励ますようにホーホケキョ
誇大妄想狂じっと見ていた雲の峯

新宮市　大矢十郎

兄さんに似た人ですと娘の便り
一難は長女又一難へ次女
寝た振りで聞けば妻娘は父思い

干からびた乳房を父と娘で疵い
八尾市　飯田悦郎

手袋の穴から見える傷のあと
死期が来て金魚だけ知る浮き沈み
看板と違う売場のインテリア
アンテナに指名手配を賭けている
東大阪市　斉藤三十四

古稀の祝い済んでも店へ口を入れ
軽装を盗まれている眼に出会い
孫に夢たくす手筋ほめてやり
日曜大工近所の庖丁研ぎもする
島根県　景山綾美

目覚しに鶯が鳴く五時十分
白鳥がいつしか帰った花便り
総括の罪状ポケットの花名刺
生者必滅嗚呼SLの解体音
島根県　中島英子

わらび狩りとなりへわける分も採る
気の多い蜂がつつじの香にまよい
再会へお国なまりの花が咲き
招かれて来ても手伝う里の母
新宮市　川上久司

里帰りいつでも出来る距離に住み
精一杯生きて疑うこと忘れ
一円のおつりを貰う手のダイヤ

横井さんの心を知るは土ばかり
公害へ枝ぶりだけの松となり
産業のヘドの間に間に生きんとす
名古屋市　吉田水車

山陰を抜ければ空が青かった
吸い過ぎぬようにと公社すましとり
悲しみを抱けば海も悲しんで
岩国市　弘津柳慶

ナフタリン臭いお金を母へ借り
セットしているのに気付かぬ倦怠期
御主人にそっくりキャンキャンと吼え
宇部市　平田実男

「水天髣髴青一髪」頼山陽の詩は死す
体験を平等と云えぬ男対女
そうだったのかそうだったのかと溜息
松江市　柳楽鶴丸

遠い日の事にはふれじ別れ道
スモッグも孕んで路地の鯉のぼり
大阪市　飛田好一

断酒して
灘伏見今は無縁のものとなり
東大阪市　宮西弥生

朝つゆの重さへ朝顔耐えて咲き
距離おいてそれから女誘い待つ
娘と歩巾合わす母の派手好み

諫早市　原田明春

くたびれた顔を晩酌ひき戻し
寄付金の話しになれば皆黙り
ヘリポート島に公害運んで来

和泉市　西岡洛酔

疑心暗鬼人の世逃げ切れず
大都会迷い込んだか赤とんぼ
忠僕の一人ぐらいはいてもよし

富田林市　浅川八郎

躾からタッチ拒まれ祖父孤独
美人やがちつとははにかみ欲しおます

薫風さんへ

限りなく伸ばして夢を一筋に

鳥取県　川崎秋女

子猫三匹老いの一日をふりまわす
児がふたり出来ても心に消えぬひと
値ぶみする女の瞳の冷やかに

★

川村好郎

酌ぎつ酌がれつ腹芸からみ合い
一瞬が永遠となる雲流る
紫陽花に惰性の日々を諭される
ともかくも日の丸を立て沖縄県
ここだけの話聞いてる熱帯魚

若本多久志

六月十五日古稀を迎う

目覚むれば又一日の冥加かな
頑固さもほどほどとなり古稀迎う
耳順より既に十年恥多し
血圧が心蔵が老いの坂けわし
それなのにまだY談に耳を立て

北川春巣

医学会帰れば風邪引きばかり来る
持たぬ者の目にもったいなや山を伐り
初夏嬉し色艶増した熱帯魚
物忘れ父のはあハハだけですみ
紙バッグ老婆も嬉しそうに提げ

西尾栞

母の日の米寿の母は家宝めき
神楽囃子墨絵のような森があり
京の宿今宵は霧となる甍
偽りの味方となりて紅を濃く
夕月に誘われて出て恋でなし

菊沢小松園

逢うて別れ別れて逢うて無駄な努力
くずれまいと積木も努力しています
儲けてる後姿へついてゆく
同人の句だ川柳バッジ光り増す
歪んでる顔が本当のことを知り

川傍柳初篇研究（百八）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

644　女郎買のこっちゃうだに母あの子　一甫

岡崎＝どら息子で、女郎買に入り浸っているのに、まじめで親孝行な、よくできた息子だと思い、人にも吹ちようしている。あの子が、あの子が――と溺愛している甘い母親である。親の目のとどかない息子の遊びの一面を知らないからである。

前田＝賛。「こっちゃうだに」「母」「あの子」の表現なかなかたくみである。

清＝どら息子であるのを百も承知のことでなお盲愛する母親、と解しているのだが。

藤井＝「骨頂」は張本人のこと。女郎買い遊びの張本人のくせに「あの子の遊びも悪友のため」とあくまで甘い母親。骨頂とあるからは、岡崎説より息子の悪あそびを認めている清説をとる。

川端＝清・藤井説に賛。

ちっとずつ母手伝ってどらにする一九・8

高須＝「こっちゃう」は骨張または骨頂で張本、発頭人の意がある。この甘い母親は息子のあそびを全然知らないのではない、知ってはいるが「張本」とまでは知らないのである。それで「あの子、あの子」と甘く見ているのである。「女郎買いの骨頂」とは、ひどく下司な言い方で、五、六、二、三の調子がギスギスで好ましくない句だ。

丸＝「こっちゃう」は張本人、発頭人の意より、野暮のこっちゃう。馬鹿のこっちゃうの、この上ないもの、ひじようなものの意にみて、清・高須説のようにうすうす知りながら生息子のように見ている甘い母ととりたい。「女郎買のこっちゃう」は、作者はうまくいったつもりだろうが、未熟でいただきかねる。

岡田＝前説、賛。

645　霊場に不相応なる川壱ッ　眠狐

岡崎＝霊場は高野山。この霊場に「不相応な川」とは、霊場なら霊顕あらたかなものであってよいはずなのに「玉の疵弘法大師見付け出し」（二三33）の毒の玉川だからである。これは弘法大師が「高野の奥の院へ参る道に、玉川と云ふ河の水上に、毒虫の多ければ、此の流を飲むまじき由を示し置きて、後よみ侍りける。忘れても汲みかしつらむ旅人の、高野の奥の玉の水」（風雅集十六）と詠んだのに拠っているもの。

丸・岡田＝賛。

646　わっきやっといふ内本田ぼたり落　眠狐

岡崎＝吉原の髪切りの私刑である。浮気な馴染客がほかの遊女に通うのを知られると遣手の指揮で新造や禿が、大門口で男の朝帰りを待ち伏せて、引っ捕えて惣花、惣仕舞の散財をさせたり、マゲを切り落とす私刑を加えた。京伝の「青楼昼の世界、錦の裏」に髪切りが軽妙な筆致で詳しく描写されている。主題句はその髪切りの瞬間で、

「わっ、きやっ」という悲鳴とともに、あわれ本田マゲが、ぽたりと落ちる。
前田＝賛。「わっきやっと」「ぽたり落」
洒落ていて面白い。
清＝大勢の女郎が寄ってたかって髪切りにするから「わっ、きやっ」とにぎやかになる。しかもズウズウしい客ともなれば、その後すぐまた
　入髪でいけしゃあ〳〵と中の丁　初・2
ということになる。
藤井＝「わっき」は私、わっち「やつ」は「やあ」の叫び声。しまっていて、洒落た佳句。
川端＝賛。
　よくつらをふみなんしたとぷつり切り　一九・8
　あれつむりが落ちやしたとげいらげら
高須＝「わっきやっ」は、つかまった男の悲鳴である。「ワッ、キヤッ」という間もあらばこそ、伊達の本田マゲはポタリと落とされてしまったという句で、吉原に限られたリンチの一つ「ざんぎり」である。
　散切りにしなとぞろぞろ上草履
は馴染みの敵娼が同輩を引具して、不実男（浮気客）の許へ押し寄せる景である。
　散切り様をお笑ひとひどい奴
　散切りで叩き放しに息子され　傍三・5
　散切りの母こりやれよ〳〵　傍三・6
等々「髪切り」の句は沢山ある。
丸＝諸説賛。「わっきやっ」は騒ぎの情景を描出しただけで、男女を特にいいたてる必要はあるまい。
岡田＝私刑を受ける男の悲鳴と解していたが、なるほど丸先生の御説とも取れる。

647　**中気をバ隣へはこぶ十三日**　　**嵐　弓**

岡崎＝暮の十三日の煤掃きである。中風で寝たきりの老人が、ホコリをかぶらないよう、掃除の邪魔にならないように、隣へ避難さしておく。
高須＝煤掃きの句には相違ないが、隣家だって煤掃きで忙がしかろう。「二階へはこぶ」という句があったと思うが、その方が合理的である。
丸＝賛。作った句のようだ。
岡田＝賛。

648　**眼病の持ッたほど縫ふいそがしさ**　　**梅　斧**

岡崎＝裁縫という細かい仕事に追いまわされて、とうとう眼をわずらったお針か針妙の意か。「持ったほど」の解釈と用例を御教示下さい。
前田＝眼病患者には、手仕事など特に自由がきかない。「持ったほど」は、これを暗示。「ほんのすこし」縫った意ではあるまいか。
藤井＝眼病を持っているように血走った充血した眼で縫物をしているいそがしさ。ほどは程度。「の」は「を」。
川端＝大ざっぱで丁寧に縫っていない。まるで眼病をわずらった人が縫ったみたいだ。註文殺倒で仕上げも乱雑なことを「眼病の（人が）持った」と表現したのだろう。
高須＝柳雨翁は「大晦日に縫う赤絹布片（モミギレ）の屠蘇袋か」といっているが、何にしても「忙がしさ」が「持ったほど」にかかるので、いろいろな説が出るのであろうが、眼病から赤絹布片を考えた柳雨説も、一応はうなずける気がする。
丸＝苦しい解だが、眼前のとき持ったほどの紅絹をとそ袋に縫う忙がしさとみる。柳雨説に従う。
岡田＝丸先生の御説の通り。むかしの眼病人は、赤い布で薬を差した眼や涙を拭いたりした。その布と同じぐらい小さい赤いトソ袋を大晦日縫う。

649　**大名こわひものかと高尾いゝ**　　**一　甫**

岡崎＝伊達綱宗候を振り通して、三股で吊し斬りにされたとの俗説にもとづく仙台高尾の、権勢と金になびかぬ意気地をもてはやしたもの。
高須＝イキとハリの吉原女郎の標本みたいな高尾太夫「大名が何サ、大名だって男は男サ」なんと威張っていたために、金の力で落籍されて、見せしめに吊し切りにされてしまった。
丸＝賛。「大名がこわいものかと文左衛門」（安八礼2）は金力。高尾は意気張り。
岡田＝賛。但しつまらぬ句。

先月号の巻頭で突然、

サンキュウだけ言えてアメリカの旅に立ち
さあ胸を張って羽田の老夫妻

などの句を発表してから五月十二日夜、老妻を伴い、日本航空のジャンボで羽田を立って、ロスアンゼルスに向った。次男の嫁の里の両親と水入らずの四人連れの旅である。なかなか決心がつきかねたが、六年振りで、川柳塔の選を栞副主幹に交替して頂いたのと、NHKと山陽新聞の選が五月には当番でない事、医師会の要務も何とか都合出来る事、留守中の診療を長男が快く引きうけて呉れた事、まだ一度も海外旅行の経験のない老妻に日頃の労を報い、よきハズバンド（？）のお手本となりたいと思いついた事、そして二年余り前からロスアンゼルスの小児病院に留学している次男夫妻がしきりに来米をすすめて呉れた事、それにもまして五才になった孫の顔が見たくてたまらなくなった事、こうしたもろもろの恵まれた条件が揃うたので三人の息子等の孝心にも応える意味で決意が固まったのである。

その外に私自身の希望としては第一に海外の川柳人に親しくお目にかかる機会を念願としてのと、昔から世界的に有名なロスアンゼルスの小児病院を次男が滞在中に是非見学したい事であった。結論を先きに言うとそれ等の希望や念願が予想以上に感銘の裡に達せられて、しかも全く苦労らしいものさえも覚えず帰国出来た事が欣びに耐えないのである。定時を約一時間遅れてホノルル空港に着いたのが午前十時を過ぎて居た。涼しい機内から出るとさすがにハワイ温度ではあったが空気が爽やなためか余り暑いとも感じなかった。しかし大勢の団体客連中で混雑しているのと、従って入国手続きや税関で意外に時間をとられて再びロスアンゼルス行の元のジャンボへ乗機の改札口に着く迄二時間近くかかった。とこ

・訪米第一信・

ロス柳人と会う

中島生々庵

ろがその待合所の前にホノルル在の川柳塔社同人である磯島三石氏と築山快夢起氏が出迎えのためお待ち下さって居たのには全へ恐縮の外はなかった。しかも甚だ残念な事には出発の時間が迫っていたので暫らく立ち話をする位しか余裕がなかったが、帰途十日後に立ち寄る予定でもあるし再会を楽しみにお別れする外はなかった。その別れの際に頂いたハワイ報知新聞を機内で落ちついて読んで驚いた。簡単に皆様にも記事の大略を申してみると『当市川柳ウイロー社では来る五月二十三日午前十一時よりワイキキ「みやこ」ホテルにおいて、大阪川柳塔社主幹、中島生々庵先生御夫妻の御来布を迎え、五月句会をかねて歓迎会を催すことになりました。ウイロー社同人並に同好者諸賢の御参会を希望致します。席上、生々庵先生に作句の選をして頂きますので、「鯉のぼり」「伸びる」各三句ずつ五月十九日の締切厳守にて幹事までにお送り下さい。なお、歓迎句会御出席希望の御方は五月十五日までに同じく左記幹事の方へ御電話下さるようお願い申します。幹事、林明春』とあって明春氏のご住所、電話番号を附記して、『ウイロー社お知らせ』と四号活字で広いスペースをとってあったのである。惟えば川柳雑誌時代から引きつづいての長い長いご厚誼とご親情を柳友ればこそと今更の如く瞼の裏をあつくする思いで一杯となり、同時に二十三日の歓迎句会に出席するのが今から待ち遠しくてたまらなくなって来るのであった。

孫らの待つロスアンゼルスが、こうなると一時間でも早くと願う子供のようにうきうきし乍らやっとの思いで着いたのは五月十二日午後九時（現地時間）。孫を中心に次男の宅で親類の人達も加えて深夜まで大賑いだった。ところが私は日常生活の習慣で毎朝朝食前に一時間ばかり散歩するのであるが、到着の翌朝も全く不案内のハリウッド街に近い次男の宅を軽装のまま大胆に

も住宅街を歩き出した。ロスアンゼルスの街はサンフランシスコやニューヨークよりも整然とした碁盤の目のようだから大丈夫と已惚れたのが間違いのもと、あの暑い事でも有名なロスの陽をあびながら二時間近くうろうろ。窮鼠猫を噛むとでも云うか、目茶苦茶なブロークン米語でやっと帰りついた。次男達には怒られるし腹はへるし散々な大失敗。そのため爾後は次男の車であるいは親類の宅の車で送り迎えという事になった。その大失敗の翌日即ち十四日（日曜）午後一時から、全く好機会に恵まれて当地での定例川柳句会（「つばめ」川柳社主催）に出席する事が出来た。これは予ねてからニューヨークの藤村涼子さんから私がニューヨーク迄伺えぬ事を知ってロスの川柳人を紹介して頂いたためで、特に国次史朗氏、石川凡才氏はたびたび次男の宅へ電話連絡して居て下さって会場もすぐ判り約三時間半に亘りほんとうに楽しい時間を持つ事が出来た。席題「底」栢野望洋氏選、「遊ぶ」石川凡才氏選、兼題「漫画」国次史朗氏選、「親」生々庵選であった。

出席者も三十数名という盛会であった。私は額掛けを添えて色紙に拙句を執筆したものを天位入選者に差し上げたところ、大変喜んで頂いて面目をほどこした次第である。ところが老妻小石が凡才氏選の席題「遊ぶ」で天位に選ばれたために大笑いになり地位の方にお譲りして結末がついたというなごやかな場面もあった。史朗氏から生々庵の紹介があり、乞われるままに『日本内地での柳界は益々隆盛となり、しかも若い年齢層及び女性川柳家が目立って活気を呈している。

日常は日本語よりも米語を多く使用されて居る皆様、殊に若い世代の二世の方に川柳を奨める事はさだめし困難とは思うが、何とかその厚い壁を突き破って後進の指導という面にもご努力頂きたい』と約二十五分間柳話を申し上げた。

この日の今一つの収穫は、日本を出発する二三日前風来子さんから贈られた。句集「揚げ葉蝶」の著者矢形溪山氏夫妻がご出席、ご投句なさって居た事である。全く初対面であったにも拘らず、句集の表紙を描いた岡村久志良さんとは日頃極めてご厚誼を頂いて居て先般同氏の宅に一晩ご厄介になった時、その図柄の構想等をくわしく承って居た事もお話申したところ、ロスでは句集の現物を見た人がいないのに私だけが親しく拝見している事、そしてその句集の中でアメリカにおける川柳の歴史、並びに国次史朗氏石川凡才氏のお写真等も出発前に拝見出来た旨をお話した事を大変喜んで下さった。溪山氏が八十八才など到底信じられない程お元気で、且幽香夫人も如何にも若々しく夫君と共に作句に精進されている由を承り感銘を深くすると共にその警咳に親しく接する事の全く予期して居なかった光栄をしみじみ感じた事であった。散会後玄関で記念撮影をとって頂き、その上お茶の会でもとお申出があったのを五時から次の約束があったので甚だ失礼であったがおなごり惜しいお別れをして辞去、私の車が見えなくなる迄手を振って下さった姿が今でも瞼の底に焼きついている。

次号にはハワイにおけるウイロー川柳社の生々庵夫妻歓迎句会の模様をお報らせする事としたい。

ロスアンゼルス・メキシコ街にて

病床の路郎先生

路郎というひと

東野大八

人生とは、白馬が戸のスキ間をよぎるが如く疾く去る—とは史記の言葉だが、路郎忌がまた訪れてきた。

私は書ダナの奥から一束の書簡類をとり出した。在りし日の先生から頂いた手紙、ハガキの類である。すべてがその日、そのときの意の赴くままの走り書だが、なかには、風雅なみどりの罫線へ流麗とながれる筆跡もあり、そのまま表装でもしておきたいほどのものもある。

「貴方の本は、紙の買出しから校正まで、全部小生がやりました。かなり熱を入れてやりましたが、誤植もあることと思います。不悪おゆるし下さい」

「貴影拝受。キズもあり、近ければ出かけていき注文もつけたいが、それも忙しいのではダメだと思いますので製版しました」

「昨日、社の忘年句会でできたての人間横丁を売りました。著者のまだ見ぬ本を……」

昭和三五年十一月十八日発行の私の本「風流人間横丁」刊行の際のおたよりである。

ひとむかし歳月をおいて、いま先生のそうしたおたよりの数葉をとりあげ、しずかに眼を通していくと、しらずしらずその眼底からあついものがこみあげてくる。

この本が出たころ、私は十余年住みついた日刊新聞社から、編集の若い連中にかつがれ総勢四十余名で、新らしく創刊する別の新聞社へ移ったばかりのときである。身辺多事をきわめ、家にも帰れない日が数十日もつづいたこともある。一体おれは、往時こうした先生の深い愛情こもるお手紙や、お声がかりにどうお報いしたことであろうか。私は、底知れぬ悔恨にうちのめされる想いで、幾度か空間に眼をすえては索然となった。

四十もなかばを過ぎて、その愛惜多い職場を去ることは、ムホンの企てであっただけに尋常一様のものではなかった。そうした生活不安の底で、川雑の原稿だけは必ず書いたことだが、その書き継ぐ内容は必然、行き当りばったりのいい加減のかきなぐりになる。先生は一度もそうした駄太でありながら没にもされず、大きなスペースを割いて下さったのである。しかも、そうした年余の愚物が一冊となるのである。実のところ、その話が出たときには、慄然たる卑屈さに総毛立ったことを覚えている。本にしても売れるどころか、大赤字である。にもかかわらず、先生は栄ある〝川雑叢書〟に私の駄文一束を加える英断に出られたわけである。明らかにこれは、先生からすれば、私への「義理」づくによると考えるよりほかに解釈の仕様がないのである。いまはたった二冊しかない〝人間横丁〟を書ダナに眺めるたびに先生を憶うのである。もはやこれは私の本ではない。麻生路郎という「人間」の毅然たる意志の結晶であるのだ—と。

先生の川柳の生涯をこの一冊に凝結されたような「旅人」は、収録された作品もさりながら、先生にとって刊行物としての一冊の出来栄えはどのようなものであったか。某日

「どうや、これ？」

と先生は微笑されながら、私の手にそれをのせてくださった。厚さ、重さ、大きさ、装禎—作品よりそれは一冊の刊行物としての価値判断を問うといった風なニュアンスがこめら

れていたようであった。私は立所に答えた。
「まるでバイブル。川柳バイブルですね」
先生は莞爾とされて
「ほんまに苦労したんやでこれ、印刷屋も往生しよって、随分泣かされよった」
上機嫌な先生に、そのとき私は先生にとっての快心の刊行物と知れたのである。「旅人」は今も私の机上からただ一度も離れたことはない。折あればひらき、折あらば手にのせるのである。そのとき、先生のあたたかな眼がそこにある。
私の親友の画家が東京で大賞をとった。その祝いの席へ川雑を持参していたのを彼が手にして、この本の表紙絵が描きたいといった。そのときの川雑の表紙は野尻弘画伯の作品だった。ただで描くのだろうなと念を押すと勿論だと答えたのである。早速、喜びいさんで先生にそのことを連絡すると
「貴下からの御申越しの件、申わけないがお断りします。多年、うちの表紙についてお世話になっている方をさしおいて、他の人のものを使うということは、その方が如何ような大家であろうと、私としては使う気がいたしませんので不悪からず御諒承下さい」
その筆跡も出てきたことだが、私は当時快よくそれを納得したのを覚えている。麻生路郎という人の気組が、これ一つにもほうふつとしていたからだ。ずばり私にそれが通じた。
先生からのお便りはまだほかに沢山あるのだが、とりあげることはさし控えたいものが多い。叛かれた人への憤り、不信な行為を犯す柳壇一部へのヤユ、そうした先生の哀切な一面が数行の達意の文章に躍如としている。
こうした書簡の一枚ずつを繰っているうち私はいつか南宋の詩人陸游を思いうかべた。彼は李白の詩の見識のなきを嘲り、杜甫にも愚作のあることを指摘し、この果敢さ故に、往時の詩壇に数多の敵を作り、その門下生にさえ叛かれていった。不羈狷介とされた彼の詩壇の在り様は、つねに作品中心からのものであったが、敵視はその作品を越えた人間の実性にあることに思いよんで、彼は愕然となり、概嘆するのが常であった。

—見渡すとユダのこころをみんな持ち

路郎先生の名作のこれは一つだが、私は痛いほど、この句の泳嘆の底にふれるのである。われは孤独の貧書生と、孤独の陸游は自嘲して窮化していくのであるが、詩人路郎のその身を噛む人間の孤独さは、名作集「旅人」の各句に、みちみちている。私へのお便りの中のこれも一枚。
「正夫君から大陸川柳界の大会のことをいってきた。大陸へ出かけたこともあり大いにチョウチンをもつつもり。この会には小生もゲストで出席するほどの値打ちがある」
そのかみの万代西五丁目の先生のおたくには、大陸の拓本の屏風や、蒙古刀などがあり私は一眼みて忽ち胸ひろがる想いをしたことである。亡き岩崎柳路さんが、路郎先生大陸へ来たるというので、飛行機が熱河から張家口へ飛んだことも想い出した。柳路さんの路郎先生への傾到ぶりは大変なものだった。
いま、私は本誌でラチもない大陸ムードをひけらかし、川柳とは無縁の心得たような雑文をかきとばし、ひそかにジクジたるものがあるが、路郎先生は二十年前のむかしから、
「大八君、好きなものをなんでも書いて下さい。うちは戦前から新聞紙法にもとづく刊行物やから……」
そういって下すったのである。それに甘えての書きなぐりだが、最近の大陸ものは大陸川柳同窓会のあふりもある。畏友大井正夫さんの同会に対する真心こもる世話人としてのキメ細やかな配慮を肌で感じることの余奮でもあろうか。
書き出せばキリがない。終りに一言。私には著名川柳人の色紙、短冊は二、三に止るが、路郎先生のものは一枚もない。せめて一枚ぐらいは…と柳友が川雑と私との間柄を頭に小首をひねる。しかし、私は根つから意に介しない。私にはつねに机上に「旅人」があるからだ。この本には先生がいつもたたずんでいられる。

—金は無くとも金は無くとも君と僕
—いつまでも肉と葱との仲であれ
—気違いじみた夫をまもり老けている
—風よ吹け抱いている子へ歩く子へ
—また辞職ですかと妻子驚かず
—文学を軽んじ馬で裾野行く
—ひとり立てば　風ふところに入りけり

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 18 —

三十五年八月号

不朽洞句帖

イヤハヤ足で襖をあける娘ら
米ソに挟まれて　その日ぐらしとなれり
フアンも疲れるだろうさ社会党の動きには
頂点に立った気　箱根で静養す
なんかにごまかされて来た平凡な一生
土地の沈下とともに　こころも沈む
地下鉄を出た気持ちなり誕生日

大阪通信病院川柳会「**眼**」

ママの眼のとどかぬとこでママをまね

南海電鉄川柳会「**不通**」

不通だと聞かされ母は眠らない

三十五年九月号（四〇〇号）

不朽洞句帖

南紀勝浦温泉にて

露天風呂少しは色気ほしいなり
二等車におっぽり出したウインキー
鑑賞用男性とやら裸なり
鳥を籠に入れるのは罪悪だろか
ママの子等　いつか偵察の癖がつき
坊っちゃんの引揚げ汽笛ながくひき

大島濤明氏（三十七年前の思い出）の文中に
うちあけて呉れて返事に困るなり

本社八月句会「**辞書**」

辞書までも質屋に入れて帰省する

三十五年十月号

不朽洞句帖

フルシチョフほどではないが遠慮せず
胸くそ悪し　代議士の低姿勢
孫が去んで元の無口になる夫婦
孫の写真を何枚撮るんだ
「マドンナ」に見降ろされてるベッド

菊田一夫作「がめつい奴」

見栄ぼうの底辺に触れたロングラン
「がめつい奴」を観ても笑って済ましとき
「がめつい奴」を商策にする社長

南海電鉄川柳会「**延着**」

延着をつなぐ音楽長すぎる

大阪通信病院川柳会「**ＡＢＣ**」

ＡＢＣぐらいはという謙譲さ

（傍島静馬）

三味を弾く

高鷲亜鈍

三味を弾く腕に自家用のっかかり
助手席の女に自賠の保証せず
あのときの事故で死んでた方がよかったと
脳軟化より入院料がこわいから

半身不髄によろめきためらうわがいのち
紋章を意識下に持つ下劣さ
盲父に卒中披露宴に出られず
あつあつの恋愛したいとまだ想い
天井が抜けているのを妻わらう
女主に神妙な悪友の変りっぷり
利益とならぬ親は消えてなくなれ
午前二時酔うて帰って寝てくれず
五十年無価値なものか詩は価値か
婆ちゃんにされてくやし涙のバー勤め

後遺症三味線弾まで保証せず
妻子バラバラ戸籍謄本ぼく一人
仲居の事故に休業保証はしてくれず
婆々はくるなと席たたされる
勝気だったが女気が弱くなり
出勤時背中のチャックあげてやる
叱ったりなだめたり道理を説いて二十年
逃避行それで会社を乗っとられ
落目落目男の甲斐性からっきし
愛故に美しと世間がとるや

近詠

須坂市 高峰柳児

停年の佗しさ目覚しにこだわらず
爪染めた手で珠数を繰り喪が湧かず
仮事務所年増の紅一点ながら
情熱の二人屋上の風を借り
引退の花道汚職がたちふさぎ

大洲市 米沢暁明

母ちゃんはうとい振りしていただけだ
思う壺そうかそうかと受け流す
よくよくの事で来たのだ引受ける
坊ちゃんのよさは世間にうといとこ
宿題のここら母の手兄の知恵

今治市 月原宵明

百合のエゴ同じ方向には咲かず
妬心燃ゆ霧島さつきもゆ如く
空洞のこころに残り灯をともし
電池切れたチャイムを何度も押していた

岐阜市 市川鱗魚

義理と言う母かつかれる夏羽織
西陣に住んでネズミも絹ずくめ
試験管親子いよいよ遠くなり
ワニ皮の財布百姓だった指
此処だけが父にうれしい二重橋

今治市 長野文庫

子の自慢から長くなる立ち話
事件もう忘れた頃に起訴猶予
伸び伸びとした日もあった折の海老
真心を節くれだった手からうけ

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自　四七年二月号
至　四七年五月号

路郎賞候補作品

北川春巣

病気せぬ薬をあれもこれも飲み　木山遠二
うちの方の会社にもあるゴマスリ器　工藤甲吉
ミンク着る女　野生の眼に光る　宮西弥生
絞れば血潮したたりそうな社会面　本多柳志
不器用に札を数えて示談すみ　岩田美代
守らない規約激論して作り　岡田拳法
人の持つダイヤを愚かと思うまい　小出智子
ヌードカレンダー貰い簞笥にしまつとき　福島鉄児
オートバイ十八歳の音で来る　遠山可住
落ち葉にも居心地のよい隅があり　若林草右

西尾栞

同病の同じ呼吸で話し合う　堀江正朗
はるばると柳葉魚は子持ちのまま焼かれ　高杉鬼遊
閏年一日さみしい日がふえる　谷垣史好
守らない規約激論して作り　岡田拳法
公式のない算盤がよく踊る　本田八笑人
指先に恋の視線がふと止まり　林瑞枝
床柱の両脇意見食い違い　木山遠二
老夫婦時計も好きなときに鳴り　遠山可住
泣きすぎる女が通夜に来て白け　八木千代
リフト孤独砂丘に落ちて行く親子　三井酔夢

若本多久志

心臓が一瞬とまる人にあい　工藤甲吉
コンパクト震わせ愛に背を向ける　小野克枝
抱擁の肩越しに見た流れ星　河内天笑
衰歓の歴史と共に酒ありき　飛田好一
胸に住む人ありきれいに女老け　木村弥栄子
芸人の何かわびしい肩が好き　不二田一三夫
串かつのこの串削る人もおり　有信新之助
愛憎の渦を夫婦として耐える　森井菁居
風に舞う枯葉にも似て失意の日　野坂つき子
燃えた日は言わず憎しみだけ残し　若柳潮花
落葉にも居心地のよい隅があり　若林草右
自嘲して夫につくす性も愛　出原敬一

川村好郎

明日知れぬ身が損したの儲けたの　志賀木石
遥かなる道へ小さな石を積む　小野克枝
閏年一日さみしい日がふえる　谷垣史好
親切な心の裏は思うまい　金井文秋
背伸びしている爪先の痛いこと　小出智子
切り替えもソフトに嫁の城となり　八木千代
空虚感南京豆はかんの底　岩田美代
幻想のレールが光る走らねば　三井酔夢
云い過ぎたこと庖丁の音で知り　舟木与根一
海鳴りを遠きいくさの音に聞く　小浜牧人

菊沢小松園

コップ酒両掌に包み明日がない　吉岡美房
車椅子ある夜走った夢を見た　田垣方大
胸に住む人ありきれいに女老け　木村弥栄子
三人目生んで男の愚がわかり　高杉鬼遊
目に見えぬ杭が支えてくれるビル　小谷仙山
商売と別に仕入れた好きな柄　高橋操子
猫の足拭いてこのひと子を産まず　本多柳志
もて過ぎた夜はプスッとして帰り　河内天笑
証し欲しむらさきの炎の消ゆるとき　小野克枝
待つことに馴れて女も歳をとり　若柳潮花

正本水客

田の籾火思い出しては炎え上がり　岩田美代
クシャミした尼僧の顔のあどけなさ　福田丁路

山陽新幹線試乗

58分でここ大阪府岡山市　不二田一三夫
札幌の雪　心地よく降る画面　高橋操子
白魚のあわ　泡として哀れにも　西　いわを
泣きすぎる女が通夜に来て白け　八木千代
おそるおそる出したオカラがお気に召し　傍島静馬
お互に労わり合って腹を立て　堀江正朗
絵馬揺れて乾いた音が吹き抜ける　垂井葵水
山低く見えて峠に雪が散り　黒川紫香
落ち葉にも居心地のよい隅があり　若林草右
たわむれに追えば女はしゃがむなり　大鶴喜由

川柳塔賞候補作品

戸田古方

野仏に道をたずねて過疎の村　武元柳子
輪の外でバックボーンを持ちつづけ　栂　みどり
持ち馴れて見ればにせもの手放せず　藤本　鎮也
一尺のゆとりへ置きたいものばかり　垂井千寿子
浴場の桶は裸の音で鳴り　藤田飛鳥
バカヤロといえるものならこんな時　南木宝子
模範囚のようにひっそり病んでいる　白石　潔
引く波に貝殻コロコロついて行き　吉結百水
夜業の手影はっきりどよく動き　堀内暁風
笑おうとすれば笑える庶民です　竹崎　寛

大坂形水

娘の家の温くさが老いを引きとめる　柳原静香
紫のふとんへ母の嵩低し　黒田真砂
満ち潮に似た倖せを抱きしめる　堀江芳子
春愁の机上白紙のままで暮れ　三宅不朽
受け付けの笑顔が消えて社のピンチ　熊野溪水
宙吊りになってみの虫死んでいた　川上久司
手を振って公判延に入る背広　堀口欣一
ここにまだ蛙が居るなり貴君が居る　竹崎　寛
薬屋根のつららに童話ぶらさがり　脇本改己
亡母点となりて心の海に佇つ　嘉数千代香

橘高薫風

人妻になって荷風を読みかえし　村井酉合
飾りつぼ一枝さされた事もなし　谷岡芳枝
中年の長さに耐えるコップ酒　関　美子
再会に月日は無駄に過ぎていず　岸本豊平次
天罰を分け合う人が居る安堵　垂井千寿子
束の間にみぞれにかわる戎橋　高杉千歩
少年にかえるすべなし雪が舞う　脇本政巳
受け付けの笑顔が消えて社のピンチ　熊野溪水
輪の外でバックボーンを持ちつづけ　栂　みどり
黙々とうどん夫婦にまだしこり　堀江芳子
男性としての意見を父に聞き　中谷利美
久しぶり学歴の差を知らされる　藤本鎮也

美しい水彩画入り
古方手書き句集
送料共　八〇〇円

近作柳樽

菊沢小松園選

煌煌とみな点してもひとり　竹原市　三宅不朽

旅ひとりグラスを持てばなおひとり

風のいろみえる気もする天守閣

飲むだけの友であったと知るベッド

さり気なくつくる笑顔と見抜く母　島根県　堀江芳子

愛の詩わたしを生かす歩をはこぶ

快復期ときには辛い水の音

嬉しくて話す呼吸は肩へのり

いいお月さまへ歯ブラシ止めたまま

靴音の似ていた窓をそっと開け　守口市　野呂杜月

訪れた此処もみくじの花盛り

赤旗も鯉もなびかせ初夏の風

老眼鏡買ったら小皺目立つなり

PCBに包まれ日本梅雨に入る

落選の其後人間取り戻し　東大阪市　落合思月

恋人が出来たかハイミス瞳がきれい

老残へ孫もだんだん寄りつかず

明日の糧稼ぐ吊革しかと持ち

味気ない世相自動販売機

定退を送る相手はしめっぽい　和歌山市　秋月宏方

永住の地は定まらず貸し植木

錦まだ飾れず古希もすでにすぎ

人生の蕾年頃ともいわれ

老醜の我にも影はついてくれ　尼崎市　中谷利美

日本語で言えと変人気に入らず

悪意ではないから困るおせっかい

考える事をテレビが忘れさせ
姓変えた訳は先生おっしゃらず
大阪市　阪上十止庵

一芸に生き貧乏と勲章と
パンのみに生きる顔　顔　通勤車
着くずれて賢夫人いま隙だらけ
特級酒もあることはある新世界
竹原市　脇本政己

腰すえて思えば卑怯なとも思い
また恩赦善人様はほっとかれ
妻留守の花もしおれたままでいる
泣きなきもすこし笑いもある夜なり
岡山県　嘉数千代香

ある決意おんなが拇印押している
屑拾う親子へまるい風が吹く
神様に任せて今日も負けている
押ピンの下で自由が許るされず
竹原市　生信笑子

ぼとぼとり椿が海に落ちそうで
大地踏みしめて過去を語らじ
嘘だとは思いそれでも信じたい
藤の花気高き女の住むと言う
岩国市　村井酉合

大切なひと言ゆえに言いしぶり
浴槽に女ごころを泳がせる
生活と夢をささえるやじろべえ
あこがれが句帳を染める朝の床
今治市　蔦本昌道

明日でない今日をどん底どう生きる
ためらいも覗く間もない自動ドアー
ない筈はない青春を子に聞かれ
衆議一決実行できぬきれいごと
今治市　真山国彦

縞蛇の方も周章てた逃げっ振り
晩霜の被害待ってて茶の値上げ
保障額ピンはねされてたとも知らず
子の居ない夫婦に佗し子供の日
今治市　古野伶人

週刊誌にへばりついてたつけまつげ
無防備の姿勢で寝てるシャンプー台
耄碌をしても出されただけは食べ
女の子三人連れて男風呂
島根県　谷岡芳枝

謹しんで相談してますマンガ本
或るときはサクラにされたに気がつかず
雲重い朝から蛙夏のうた

鮎の背に妥協の出来ぬ線を見る
大阪市　小谷葉子

記憶の中一つの貝になっている
愛の速度別の私が制止する
花柄を撰って心貧しくなるばかり
待つ人に噴水夢を与えしか
東京都　宮崎美津子

庭の八重三日の旅の留守居せず
七度五分では乱せない主婦リズム
壁ひとつ破りたい春のいたずら
鳥取市　両川洋々

巻き添えになるとも知らず判を押し
葬式へ仏も知らぬ人が寄り
誰れにでも孤児は抱かれる子に育ち
愛媛県　小笠原仲美

コマーシャルより見落ちする宿に着き
団体はすぐドヤドヤと湯へ急ぎ
接待のあるじ巧みなピエロ振り
大阪市　小谷清女

ねむ気さすだけの本置く枕もと
聞いている顔でプランを考える
置き去りにされぬ心に鞭を打つ
和歌山市　樫村ふみよ

信号を待たずに雲は走り過ぎ
春がもうそこまで来てるわけぎぬた
いつからか親へ批判の目をむける
松山市　谷のぶお

お茶のめる幸やっとわかりかけ
ハッハハとテレビに笑いひとりいる
何か秘めてる壺に形のあるかぎり
新潟県　市川一峯

老令年金 額に不足は云うまいぞ
娘の恋を母は女の眼でさとり
金婚の夢かけめぐる明・大・昭
守口市　岸本豊平次

立って寝て歩いて三歩の城の主
子が走るものと信じてレールしく
駅看板そのままにして倒産し
島根県　槻谷一葉

思い切り派手な色着て見たい日も
思う事みな打明けし日記帳
雑念を捨てて毛糸の目を拾う
和歌山県　玉井豊水

商談の他はなんにもない親子
母の日へせめて笑顔をプレゼント
地頭には勝てぬ地蔵も空け渡し

大阪市　柳原静香

仮面ライダー覚える耳を持たぬ祖母
人を待つ駅で旅心がうずき出し

千日デパート火事

母の日に母の悲しきニュースきく

米子市　増田竹馬

モーニング出す靴ベラは手品めき
文人墨客としてベレー帽のかぶりよう
春宵一刻老も誘いに乗って見る

新宮市　小林暢

勝浦でねむり和歌山駅で醒め
世の流れ知らずしらずに巻き込まれ
前むいて歩いてみたい蟹もいる

鳥取市　佐々木静泉

ふる里のなまりのはずむ駅におり
遠景で見ほれて近くであきれはて
月末は一家の柱とたてまつり

山口県　粟井さちえ

不仕末を訓すにもどかし電話口
また次の移転に備える箱を積み
春うらら老人会も動き出し

寝屋川市　福富隆子

欠航のとぼとぼ土産と雨にぬれ
恋人の目鼻がついて貯めはじめ
腹立ちをとめるチャックがしまらない

大阪市　平井露芳

原告が勝って太陽日の目見る
血となり肉となりPCBともなり
ユアホーム建つがマイホーム建たず

島根県　榊原秀子

ミネラルの水のうまさを買う都会
娘の晴着満足させた染め上り
もう送るばかりになった荷と座わり

今治市　大本バット

ラーメンを中に駈落ち相談し
肚の底探る握手を写される
神様を起こす心算の鈴を振り

今治市　伊藤一郎

風紋の皺なら消える日もあろに
上位とはこいつか妻の団子鼻
音痴の児音痴の母の唄で寝る

今治市　今井松花

日曜の予定結婚式二つ
矢張り良かった最初の見合い
更に又過保護にさせる子供の日

今治市　原田輝親

モーテルのネオン屋根から差し上げる
大学で制服を着るコーラス部
しまっとくだけの着物を買いたがり

和歌山市　垂井千寿子

ボーイフレンド意識しだした赤い爪
お茶の間へ女の匂う初夏の風
留守番の時だけ音痴歌い出し

和歌山市　ふきあげ虎城

わがままを聞き入れすぎた日曜日
お守りの値段効き目も違うらし
火をつけておいて足音遠ざかり

大阪市　堀口欣一

心中の舞台に霧が立ちこめる
新幹線岡山までは用がなし
商店街の中に変人古本屋

備前市　武内雅堂

目覚めてもめざめても戦車が追ってくる
カーテンの奥のヌードを盗まれる
人妻と別れてドラマ裏返す

羽咋市　三宅ろ亭

造物主の繊細雑草にまで及び
剃刀の切れ味心にしまいおく
禁煙の宣言ナンセンスでおわり

島根県　錦織文子

腹立ちが遮ニ無に釘を打たせてる
子等の居ぬ初夏の佗しさ金魚買う
なぐさめの言葉の裏にもあったとげ

竹原市　楠貞子

空気も水も人の心も汚れ切り
大声で話し善人かも知れず
シグナルの青を待つ間のせち辛さ

寝屋川市　江口度

釣れるまで意地でも竿を出し続け
秩序あるメーデー過激派物足らず
だんだんと親子の笑う画面ずれ

東大阪市　藤田飛鳥

北風がよぎる透き間に人を恋う
思いなお広がる旅の一ページ
真実を写してほしや青い空

藤井寺市　古結百水

物問われ返事に腹の立つ日なり
表札をあげれば我家らしくなり
漢語調つい片意地をのぞかせる

大阪市　河原林比呂路

カンパまでねだる署名を皆にげる
白票を入れて抵抗したつもり

人生のシグナルいつも黄ばかり
大和郡山市　森田カズエ

理数科が好きと云う娘の無口
乱雑にみえても僕にわかる部屋
花ことば忘れぬ妻にあるぬくみ
尼崎市　小林文月

名文を殺してしまう句読点
校正に一寸まどいしかなづかい
大洲市　堀内暁風

馬鹿にした予報びっしょり濡れて来る
アリバイの口下手だけに疑われ
大阪市　白井孝子

だまされてまだ小難と言い聞かせ
レンゲ摘みまだ動かないランドセル
氷見市　関美子

解熱剤見込み買いして過疎に慣れ
死ぬこともなかろうにとは第三者
橿原市　岩井本蔭棒

歯ブラシで見回る程の庭でなし
生甲斐はタバコ一箱酒少し
東大阪市　坂東靖子

珍客へ手料理テキスト習いたて
古テレビ楢山行きを待つ如し
横浜市　増田豪城

儲け方教え細々食って居り
同窓会通知浪人の子にも来る
新潟県　高野不二

秀才も仲人同じほめ言葉
事故のすぐあとで惜しそな顔をする
大阪市　藤田頂留子

又停滞してるなとつばめ背を返し
諸行無常まざまざ見せたビル火災
和歌山市　増田めぐみ

花は散る又来る春へいさぎよし
紫のふとん不治の病と知っていた
鳥取県　林露杖

したたかな時雨逢瀬にまっしぐら
昇進という名 辺地にとばされる
松原市　玉置重人

色も香も耳学門と違うとり
花びらをたたんで芍薬寝る姿
豊橋市　鎮浪翠月

たかが酒もろくも人を狂わせる
亡骸を運ぶ蟻でも悲しかろ
松江市　興富喜子

幸になれて感謝にソッポむく

手のとどくところに幸かくれてた　仙台市　川村映輝

おみこしも肩が痛いと断わられ
がめつい奴儲けた上に脱税し　七尾市　松高秀峰

お経より駐車の方でよく稼ぎ
納得のいかぬ話へ生返事　新宮市　川上富子

シャッターをたのむにどこも二人づれ
意地はっていても女でいたいから　今治市　渡辺南奉

胸の火は燃やさずさりとて消しもせず
倖せは菜漬がうまいだけでよし　羽曳野市　大峠可動

現実に触れれば物価汗を呼ぶ
太陽があるから朝の窓を開け　愛媛県　小山悠泉

本人も嫁く気になった問合せ
民宿の寝相を月に覗かれる　鳥取市　近藤秋星

晴天の下に故郷の母を置き
頑張れよ元気を出せと窓の月　鳥取県　高尾京子

指輪など知らぬ指なり鍬にぎる
いたずらのあとを残した子の寝顔　鳥取市　有田鹿の子

子の便り書いた夕べはよくねむれ
山の春すがりつきたい雨上り　吹田市　吹田三郎

復帰おめでとう沖縄も刑務所も
先生に教壇の顔デモの顔　河内長野市　井上喜酔

遠慮してたら隣りから箸が伸び
貴重品にされた故郷寝てばかり　岡山県　山田止水

霊柩車の方から俺も予約され
軍歌しか知らぬお酒をもて余し　呉市　佐久間文明

つまらない言葉のあやで夫婦もめ
発車ベル駅そば舌を慌てさせ　池田市　石井文三郎

湯上りに裸追っかけてんか粉
大空をゼットに追われあげ雲雀　島根県　拇みどり

さりげなく一輪さした無人駅
五月晴墓前で対話してあきず　島根県　東原福子

火の精が陶器の肌に生きている
切札の一歩手前で妥協成る　宿毛市　山本窓花

オブラート破れて薬のにがさ知る
スマートになりたいばかりになわもとび　釧路市　泉　きよし

初陣はいつかとポルノ論に沸き
一対一すぐに誤解と知る握手　東京都　大工　チヨ

葱剝けば産地の違い目に泌みる
一週間車内のビラは泣き続け　青森県　波　ただお

丸裸見せて稼いで拍手され
今日からは二人三脚ヨーイ・ドン　島根県　安達　小茶坊

青春の夢は大きくもてと父
きょうの雨あしたの花を連れて来る　鳥取市　大塚　豊生

踏めば鳴る砂丘わたしも踏んでみる
生きているような笑顔を額に入れ　堺市　栗本　藤持

借り着とも知らぬ仏に焼香し
医療費ただになっては病みもせず　弘前市　小山内　貞男

一言のところであわぬ妥協点
衣裳展家にも気になる娘が一人　島根県　安達　潮音

愛情恙なく親へ嬉しい旅だより

今日だけは許せ血圧症もほしい酒　鳥取県　福田　陽山

横井さん天勾践で頭たれ
冨士山に登る夢あり老の夢　高知県　岡田　星雨

あの時の値打をはじく五ツ珠
別れろと酔わしてくれるのは他人　青森県　岩淵　一星

母のない児に参観日多すぎる
子沢山住居不定のまま一人　鳥取市　藤本　鎮也

風当りどうであろうとマイペース
釣り上げた蛸の目玉ににらまれる　鳥取市　藤本　佳女

五十の抵抗口紅ちょっぴり塗って出る
ネジを巻きすぎたかカタクな子に育ち　鳥取市　藤本　恵子

たき火の輪見知らぬ顔も手をかざし
ふる里の味がレンジで煮き上がり　米子市　佐伯　越子

嫁ぐ娘と同じ布団に一夜寝る
代々の主が居そうな蔵の中　大阪市　白石　良圭

事故防止ただ白線を引いただけ
南九州　高崎山にて

猿の近寄るまでシャッター待たされる
大東市　岡部シゲ

説明をテープで流す京の寺
八ツ手の葉親子か夫婦か蝸牛
大阪市　須浦つね

駅毎の階段きらう年となり
革新もない袖振れずバス値上げ
大阪市　松岡進

末席で返杯を待ついける口
快方に向う我侭を嬉しがり
河内長野市　森本黒天子

笑い声まで入れて長距離長電話
大阪市　塩満敏

能登だけに日本の自然があるみたい
大阪市　岡本まさひろ

老醜をテレビに出やはったとはやされる
羽曳野市　麻野幽玄

懐ろの金腹芸の裏をかき
福山市　酒井日出夫

兄さんが注いだから僕注いであげ
大阪市　新川貞祐

しもの世話習わせといて先にゆき
泉佐野市　大工静子

けんかの日懐し戒名と差し向い
島根県　岩田三和

公害をさけて田舎へいらしゃい
鳥取市　藤本和宏

結婚を急いで友は嫁きおくれ
名古屋市　吉田文枝

老夫婦なにかというと二人立ち
大阪市　広畑賛平

鯉のぼり親喜べど子は知らず
大阪市　内藤ますゑ

ストもマヒも乗り越えて私は出勤
大阪市　今井隼人

笹舟を流した小川今もあり
大阪市　花田繁子

嫌な声も猫には恋のささやきか
大阪市　木村濁水

猫の恋すんで静かな夜になり
大阪市　村島秀村

七重八重花のトンネル通りぬけ
高槻市　山田スミ子

公害の海にもやはり春が来た
松原市　守屋万竿

もう妻の声で買うてるハネムーン
大阪市　鈴木生仏

へそくりで行けとはわびし善光寺
松江市　西田溥子

夕映えは戦争処女の恋の色

甍の艶

橘高薫風

平安川柳社の福永清造・伊藤入仙・西沢青二・田中秀果・北川絢一朗の五人句集が、十五周年の記念に出版された。五周年の時の、やはり同じ五人集の「塔」に続く二部作である。塔と甍。私は平安十五周年の大会当日、「甍」を手にして、これら平安川柳社の中心をなす五氏が、まるで平安という本山の、それぞれ五つの塔頭の住職のように思えて来たのだった。清造氏は明治三十九年、入仙・青二・秀果の三氏は明治四十二年・絢一朗氏は大正五年の生れである。浮世の起伏に耐えた五人の容貌は、頭を丸めると、そのまま立派な僧の貫録となる。大会の華やかな雰囲気の片隅の椅子で、私はそのような想像を逞しくしていたのである。重厚で、善意の、洒脱なそして華麗な作者のたたずまいに触れることにしよう。

理事長の福永清造氏の圧巻は、「妻逝く」の一章である。掲載の小文も高所からの発言で、共鳴啓発される。

出世に遠い制服壁にぶら下がり
要求が通った扉みんな開け
母の日のおまけに父の日をつくり
笑いは家に置いて来た婦人帽

妻逝く

馬鹿馬鹿馬鹿これから楽ができるというのに
ひとり食う飯を不幸と結びつけ
こころの隅の亡妻と茶をたてて飲む

伊藤入仙氏の句は、新しい傾向の多い平安誌にあって、ほっとした安らぎを常に与えてくれる。年季の入ったものの持つ味である。

似てくると浪費癖まで親ゆずり
洋式のトイレ農協さんが客
オトイレはビタミンの色残暑なり
知っているくせに二人にしてくれず
金のいる女を連れて菊花賞
一年に儲ける月と使う月
悔い晴らす酒の隣にいる女

西沢青二氏は、十五才の時、古川柳を教えられたことから開眼したという早熟さは、その洒脱ぶりに通ずる。

殺してもやはりいただく手術料
三面鏡左右はよそ見してる顔
雲水の素足芸妓の素足おお寒い
もめていた二人厠へ来てならぶ
影長う手錠を見せず二人行く
牧師またもや天にまします神を呼び
金魚退屈掬われてみてやろうかな

田中秀果氏は、仇名を村長さんというのだそうだ。賞められても貶されても同じ調子で笑われる村夫子然とした大物である。

保母のゴム靴の裏にも花びらが
銭のある日も与太郎はついてゆき
米二合炊いて表札出している
騙そうとするものみんな光るなり
順番に死ぬとかぎらぬ金をため
毒舌家朝は朝顔見てござる
駅の名を読ませ母子の旅つづく

北川絢一朗氏は、孤炎の譜、矢音集、雲塵抄の三章にまとめられた。句に張りのあるのが個性的である。

はらわたに酢をかけ策士たらんかな
いなずまの音なきがよしひそと逢わん
良心のありかはここか動悸する
名曲を聞くあきんどの顔のまま
胸にある仕かけ花火に夜が来ない

川柳塔柳箋

一冊　七〇円
送料　七〇円

灯を消せば波浪濤と孤がそだつ
月曜の同じこころを朝のバス

右のように、五氏ながら伝統の作家である。然も平安の新鮮さを育てておられるところ衷心から敬意を表し、ご加餐をお祈り申し上げる。

むかしむかし

香川酔々

母親に押しつけられた傘を持ち
木綿着でおごそかな父となりおほせ
左遷される友の手荷物提げてやり
ブランコの後で女は櫛を借り
もう少し起きていますと梅暦
辞書を引きかけて先生思い出し
仏の日石につまづく心持
踏切りで引き戻された恩がありボーナスで父の腕前疑ふな
先代はのれんを一歩出ずに死に
あとあとの事が気になる人と飲み
ポケットへ名刺をよくも見ずに入れ
浪六が二三冊ある長火鉢
妹を仲居に使ふ小料理屋
ハーモニカ薬局にただ一人居て
張物屋越して空地に草が生え
男湯で時事問題を聞いて来る
空ばかり見ている息子意見され
パツパツとよむだけ百円札は無し
ナショナルの五迄は父もやった筈
子を連れて仲居になっているさうな
ラッパ節一寸三味線貸してみな
旗の影がただうららかに延びて居る
新世帯春をゆっくりさし向ひ
春霞女房の里へ行くときめ
約束をやうやうはたす伊勢詣
偽りの世を鉄橋の下から見
昼日中蝿捕る用があるばかり

★

これらの句は、川上三太郎編「新川柳壱万句集」（昭和二年刊）に採録されている路郎先生の句である。

むかしむかしの四十年以上も前の句である。したがって現在では、注釈なしでは、わかりにくいようになっている句もある。

二、三述べてみると、

もう少し起きていますと梅暦

この梅暦は、江戸末期（一八三二年）為永春水作「春色梅児誉美」のことであろう。春水は、式亭三馬の門に入り、戯作者となった人である。水野忠邦の天保の改革により、風俗壊乱の罪で手鎖の刑を受け、（手に錠をはめられることは、執筆禁止ということにもなる。）不遇のうちに亡くなった。梅暦は「悪番頭のため家を追われた遊女屋の養子丹次郎というハンサムだが力のない男が主人公で、許婚のお長、深川芸者の米八・仇吉の三人の女性を配し、誤解から嫉妬して争いがおこるが、丹次郎が武士の落胤とわかって無事家をつぎ、お長が本妻、米八が妾になる。」という筋で、読本特有のかたさもなければ、読みにくさもないところから、婦女子に、非常な歓迎を受けた。現在でいえば、川上宗薫先生作ぐらいかも知れない。そこで、読書に熱中し、もう少し起きていますという婦人のことばが生きてくるわけである。

浪六が二三冊ある長火鉢

若い人には、もう馴染みの薄い作家であるが、大正、昭和初期にかけて非常に人気のあった村上浪六のことである。時代小説をよくし、歯切れのよい文章を書いた作家である。いわば、大衆に親まれた人であり、大家さんの居間か、お女将さんの居間かそれは分からぬが、その居間の感じがいかにもよく出ているスナップ的な作品である。

張物屋越して空地に草が生え

筆者の子供時代に、近所に洗張屋があった。現在では見られない職業だが、着物をといて、洗って、竹の細い棒の両端に針をつけたもので、布をピンと張って干すのである。むかしの洗濯屋である。布を干す場所がいるから、張物屋は、かなり空地が必要である。その張物屋が引越をしたので、空地を使わなくなり、草がのびて来たという句意である。

先生も腕白時代には、その空地で、チャンバラゴッコでもしたことであろう。

ナショナルの五迄は父もやった筈

大正から昭和七、八年頃まで、旧制中学校で使われた英語の教科書がナショナルである。松下電器のことではない。その頃の中学は、五年制であるから、父もナショナルリーダーの五までは勉強した筈というわけである。アアソレナノニ、ソレナノニ、パパに質問するとさっぱり英語が分からないということで

ある。やはりママのほうに聞いておけば、よかった？　パパはママに頭が上がらない!!

案外先生の実感かも知れませんね。

ナショナルリーダーは確か、岡倉由三郎（岡倉天心の御子息だったと思う。）先生の編で、当時の中学校で大いに使われていたものである。もちろん国定教科書ではない。国定教科書は小学校だけで、中学校は検定教科書であった。現在教科書は全部検定である。

時事吟でなくても、歴史は流れているから、句の理解も難しくなる。わたしたちが作句している句も、後世の人がみると、随分理解しにくいものが出て来ることになろう。面白いものである。

これらの句のなかで、句集「旅人」に先生が、採られたのは、「ボーナスで父の腕前疑ふな」という句だけだと思う。

「旅人」は、いかに厳選された句集であるかということが、如実にわかるのである。

きのう・きよう

本多柳志

◇イスラエルのテルアビブ空港で五月三十日、三人の日本人ゲリラの乱射事件で百人に余る死傷者を出すという不祥事が起きた。日本の日本人の国際信用を失墜したことで政府も国民も大きなショックをうけた。世界の人達はこのことをアラブゲリラの暴挙とは見ないで「やったのは日本人だ」「日本人は何をやるかわからん国民だ。まるで狂人だ」となる。

エコノミックアニマルジャパンはカメラやラジオの外に、こんなキラーまで作って輸出するのか、と云われても仕方のない不祥事件である。犯人の一人は、ナンバダイスケと名のっているそうだが「俺のは特定の人を理由があって狙ったのだ。君達のようなきちがいのまねはせぬよ」といって本ものの大助が、冥土で苦笑してると思う。

◇人間が二人以上で集団生活をすると、それが会社であろうと国家であろうとつまり、一つのグループ、組織の中には一、居らぬと困る人二、どっちでもよい人三、居っては困る人の三通りの人があるようだ。私達も一には成れんでも三の人には成りたくないものだ。社員何千人というような大会社の中では三人や五人の、三の人が居っても余り目障りにもならないし、全体の能率にも大きな支障はなかろうが、僅か十七人というような町工場では、たとえ一人でもこんなのが混っていると目障りでもあるし、工場全体の能率、信用も落して、取引先からも誤解されてしまうのではなかろうか。十七音の川柳の場合にも全く同じことが言えると思うので、出来れば一字の無駄のない、十七字全部が役に立つ生きて働く文字であってほしいと思う。

社長から耳打ちされて来た微笑　柳志

一分間の柳論

工藤甲吉

川柳が短歌や俳句の下位扱いにされ慨嘆にたえないという人があっても、川柳に川柳独特の「川柳味」がある以上、そんなことなどあるものか、というのが、これまでの、私のゆるぎなき一つの自信であったのである。

ところが最近のように川柳らしい川柳がおろそかにされ、作者のもとへいちいち足を運んで聞いてみないと、その意味がわからないような川柳や、短歌あるいは俳句的傾向を帯びた川柳が〝横行〟し出すと、これまでの自信にいささか不安を覚えてくるのである。

川柳の在り方、進み方については、人それぞれの考え方がありとやかく言うべき筋合いではないが、ただ、川柳をしたり、川柳をウンヌンするとき、川柳の母胎であるところの俳諧、前句附の精神や「川柳は人間淘冶の詩」であることなどを忘れては、川柳が最後にその生命さえ失くしかねない事を、私は恐れる。

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

カメラから見る梅溪の雲の白

若柳潮花

フアインダーから覗く景色というものは、色彩も鮮明に一画だけが浮彫りされて美しく見えることは誰もが経験することである、それが雲かと紛う梅の白が水に映える姿であれば尚更らであろう。

水浴びの鳥を見ている人妻か

橘高薫風

日本画のタッチでえがかれた淡彩なエロチシズムを感じるのは私だけだろうか。この魔術は人妻かのか止めにあるのかも知れない。

働けば叱られそうな国となり

工藤甲吉

働くことが美徳でなくなり、蓄積した外貨は国を危くし、米を作る田は強い制限を受ける。まことおどろおどろしき世とは成りぬ。

あぶく銭一日じっとしておれず

石川侃流洞

何気なく言いすてて、人物なり情景なりが眼に浮かぶようで面白い。

お世辞抜きでという嘘の美しさ

垂井葵水

嘘の美しさと言っておいて、作者はその醜さを詠っている。

太陽をまん丸く画く子では無い

小野克枝

赤くて円い太陽を画いていては子供の絵は落第なんだそうである。青い三角の太陽を描く子の個性を喜んでそのまま伸していって良いものであろうか。

男なら酔うてみる手もありはあり

森井菁居

上五中七の平凡さを、ありはありと反転して逃げるとこで句を生かしている。

見えぬのに色で歯ブラシ決めてくれ

堀江正朗

他力本願の生活に対する軽い反抗と、満ち足りた諦めと。私には詠めない句である。

いさり火ゆらゆら生活の灯と見えず

八木千代

宿の窓から見える鳥賊釣の灯、旅情とは関りもなく、そこには生きてゆくための厳しい生活がある。

敬遠の四球のような辞令が出

野田素身郎

栄転の名で都落ちを強いられる、主流を離れた宮仕えの感懐。

殊更にうかぬ顔して遅刻する

吉岡青香

喜びを表に出すまいとする男のはにかみが微笑ましい。

二号を認めてせっせと貯めはじめ

有信新之助

別れる心算りは更々ないが、頼れるものはガッチリ握っておこうという女の業のようなものが感じられる。

別れしかない風船の糸が切れ

小幡里風

むつかしい人生の会者定離をサラリと風船に托して鮮か。

終っても幕が下りない夫婦なり

板尾岳人

命のつきるまで、いやその後々まで幕が下りることのないのが夫婦というものかも知れない。

強いられた沈黙女私語となる

鈴木村諷子

リズムに何か固さがあるのは惜しいが、小声になってもまだお喋りを止めようとしない女性の姿が眼にうかぶ。女はおんなと仮名書にしたい。

▼前号P4若柳潮花氏作を次のように訂正。

—舞い落ちて匂いもとめぬ花になり

—名木と云われ淋しい花をつけ

近作柳樽

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高薫風

春の誘惑庭で食事を思いつき　柳原静香

庭で食事をとることを思いついたとは、春の心のはずみがよく表現されている。春の誘惑とせず、単に、春の風、春の客、と平たく云っても、その感情は充分出る筈だ。

梨になる花の盛りに巡りあい　高杉千歩

鳥取県の県花である上品な五弁白色の梨花の群がりを見て、モゴモゴとした梨の実を連想した作者の感覚と把握は鋭い。桃や林檎の実を配するよりもぶこつ者の梨が最もふさわしいのだ。

貨物にも行き先がありおらが旅　生信笑子

気ずい気ままな旅の感じを表わそうとして「おらが旅」とされたのだろうが、「ひとり旅」と自然に詠んだ方が良かったように思う。こんな小さな発見から、深い旅情がにじみ出るのだから、十七音字の魅力は絶大である。「誰もいないプラット・ホームのお月様」「美しく語ろう満ちて来る潮よ」の句にも作者の感受性が汲みとれる。

盗まれたワサビよ辛くなるでない　岩田三和

作者の感情を直截的に云ったことが、この句に独特の味をもたらせた。このような句があって楽しさが増す。

なんとなく気が合いそうな猿も居り　川上久司

猿山にはさまざまな性格の猿がいる。作者はその中のユーモラスな猿に共鳴をしたのだろうか。淋しさを噛みしめているものにわが姿を見たのだろうか。作者の優しい人柄も偲ばれる。

自負抱いてあわやもんどりうつところ　泉きよし

大きい自負を抱くこともあながち悪いことではないが、身に余ると、えてしてこういうことになりかねない。「あわやもんどりうつところ」などという表現、非凡である。

小商人自分の好きな物を置き　山田止水

悠々とわが商売をたのしむ小商人。無口で変屈で、目から鼻に抜ける商人の多い世の中では特異な存在だが、世間はよくしたもので、そういう店を最貢にする客があるのだ。

結構な趣旨に資金が集まらず　伊藤一郎

趣意書を見ると誠に意義のある企で速座に目的達成と思わせるものの、思うようには資金が集らず、あたら好計画はたち消えになってしまった、ということが往々にしてある。そこで政治家や顔役の名前をということになるのだが、利権屋は清潔な事業には見むきもしてくれないものだ。

卒業の明くる日カツラ買いに行く　垂井千寿子

カツラが流行し出すと、猫も杓子もというのが女性の心理であるらしい。学生時代には、それでも自重していたものの、卒業となれば早速それを買い求めるというのである。女性心理と卒業の開放感がうまく表現されている。作者は川柳に手を染めて日は浅いと聞くが仲々老練な句を作られる。「あくる日」としたい。

思い出が欲しく看護婦さんに逢いにゆく　錦織文子

「母は逝く」の前書がある。白衣の天使を対称にされて句が生きたが、句は表現技術より以前の心情が大切であることがこの句で判る。

靴下とパンツ一度に脱ぐ文化　今井松花

最近、パンティストッキングというのが流行りだした。便利なところがあるからだろうが、世の移り変りにつけて、文化というものを再認識しなくてはならないと、この句は思わせるものがある。

▼五月号P25秀句鑑賞訂正。

——平社員一直線に睨まれる。　態野溪水氏作

川柳五十三次（二十二）

富士野鞍馬

45 庄野

石薬師から鈴鹿川べりを二十七町（三キロ）のぼると庄野である。「名所記」には、

「この宿の名物は俵のやき米なり。その俵のなりは、大きさ握りこぶし程なり。青き緒にて編みたる小俵なり。中をまた青き緒にてつよくしめたれば、リンゴの形に似たり。内にやき米すこしあり、家ごとに並べおきて売けり。往来の旅人、買い求めて国もとの息子孫どもに土産とてとらするぞかし。」

と、珍らしい名物があった。

東十町（一キロ）ばかりの所に、日本武尊の陵、白鳥塚がある。

広重の絵には、竹藪と雨降の風景が描かれてあるが、これは五十三次をかいたうちで、第一の傑作といわれている。今でも鈴鹿川の堤防の下には、竹やぶがある。

この宿は、四日市と亀山にはさまれて繁昌しなかった。宝暦八年（一七五八）には旅籠が四軒しかなかったという。

46 亀山

庄野から、また鈴鹿川にそって二里（七・九キロ）さかのぼれば亀山に着く。

亀山城は、広重の絵にも描かれ、天正十五年（一五八七）は岡本下野守の城であったが、その後城主は度々かわって、最後は石川主殿頭六万石であった。烏丸光広の狂歌

亀山をせなかにおいて春の日の
あたたきまに甲をこそほせ

は、この城を詠んだのである。

またこの亀山は、芝居の「元禄曽我」で知られている。元禄十四年（一七〇一）五月九日に、亀山城下で、石井半蔵、同源蔵の兄弟が、父兄の仇赤堀源右衛門を、二十八年目に討った。と伝えられている。

47 関

飯盛りに褌を解く関泊り　集馬（一〇六4）

亀山から一里半（五・九キロ）この関から伊賀、大和へ通ずる伊賀路が分れる。また京都方面から伊勢参りの伊勢別道もある。古く鈴鹿関があったので「関」という地名となった。

得ぞすぎぬこれや鈴鹿の関ならん
ふり捨てがたき花の陰哉

と、藤原定家が詠んでいる。この鈴鹿の関は、七、八世紀のころ、逢坂、不破と共に三関といわれていた。

「名所記」に「遊女多し、形つくろひ旅人をとどむ」とあり、相当にぎわったらしい。

関には有名な地蔵さんがある。

関の地蔵で笑ふまい笑ふまい　東水（三一33）

と川柳に詠まれ、この地蔵の開眼を、関東へ行脚の途次の一休禅師にたのんだ。一休は早速承知して、地蔵の頭から尿をしかけて、さっさと東へあるいて行った。

開眼と袈裟ゆりあげて一トひよぐり　（九四10）
とんだ開眼一休はのろり出し　徳平（七七30）

開眼をしたも和尚のとくびこん　吳竹（一〇六12）
—とくびこんはふんどし

開眼は既にはこする所也　菅裡（六九32）
とんだ開眼身ぶるいをしてしまい　尾長（七一35）

驚いたのは土地の人々で、地蔵さんを洗う

やら、供物をそなえなおすやら、一方では、アノ気狂い坊主めと追いかけた連中も、地蔵を洗った人も、不思議や、たちまちぶっ倒れて、気が変になった。それで改めてそれを癒してもらうため、一休を追いかけ、桑名の渡船のとこで追いつき、この始末をいうと、一休は、これから再び帰るに及ばぬと、ふんどしをとって、これで地蔵の首をくくっておけといったので、そのとおりすると、さきに気の変になった者はみな癒った。それでふんどしはそのままくくりつけて置いた。

開眼をすると一休ぶうらぶら　串柿（三一22）

褌を輪袈裟に懸る石地蔵　幸司（七七33）

一休は関から股がぶらぶらし　（明元義5）

ふんどしをとると地蔵は腹を立　五丁（六七15）

一休は二度開眼でフリになり　（宝十一智2）

一休の虱地蔵のつらを這ひ　解保（九〇12）

とんだ坊主だと地蔵を洗ってる　福松（六一19）

一休やあぶらくさいと地蔵いい　江山（一二八17）

ところが、一休、それから関東を行脚して、都へ帰る途、再びここへ立ち寄り地蔵の首のふんどしをはずして、かねの緒にとりかえた。それでこのかねの緒がふんどしの丈の六尺であるという。

開眼をたれろと関でその当座　南豊（九六34）

開眼のふんどし今に土用干　定岡（六八31）

そのふんどしが宝物として残されてあるかどうかはわからない。

ふんどしの地蔵へ小まん願をかけ　（明五礼6）

国貞の絵には、小まんが馬を曳いているのが描かれてある。小万は、関白子屋の出女で、丹波与作の愛人、与作を馬に乗せて、関から伊勢路へ落ちていったという。（丹波与作小万夢路の駒）

七夕

不二田　一三夫

「七夕」が、戦後「たなばた」と読めるようになったのは四十五年以後だが、これはどう考えても、七夕を〃たなばた〃と読ますのはムリのような気がする。もしこどもにルビをつけてくれといわれたら、あなたならどうする？

木という字を書く場合、ぼくらはまず一を書き、つぎに棒を引き、左右へ八を入れる。ところがこのごろのこどもは、棒を引き、つぎに一を書き、左右へ八を書く。

つまり木というものは立ての幹が先きで、つぎに枝が横にのび、そこへ葉が出る。なるほど木という字を見ると、そうなっている。

牽牛星と織女星がデートするなんてことは信じないが、怪獣がデートするといえば、こどもらはなっ得するだろう。

（西日本新聞〃暮らしの百面相〃から）

見る人に星はつめたくあたたかく　岸本　水府

きようは七夕。都会、とくに大都市ではスモッグ、ネオン、高層ビルなどのため、星はカゲがうすくなってしまっているが、この日ばかりは星空を仰いでみたくなるのが、人情というものだろう。

この作品――同じ星をながめていても、見る人の環境、気持ちしだいで、印象がいちいちちがう、という人のこころの微妙さを、改めて味わわせてくれる。この作者には

終電車夜ふけたわけがみなちがい

という句もある。星と終電では題材がまったく別だが〃人さまざま〃というところが両句に共通している。作者のたしかな〃川柳の目〃が、この二つの作品を生んだ。

七夕の宵を同窓会と決め　後藤　梅志

年に一度だけデートする、という二つの星。地上では同じ晩に同窓会。いささか風流。

（小泉　戸牟）

ざっぴつ・しゅんじゅう

私のメモ

吉田水車

◎私の川柳作句三十年間に一体どんな業績があっただろうか、自責に耐えぬものがある。

豆秋兄の句に「いも虫のなんぼほうても壁だった」と言うのがある。まさに私の作句はいも虫である、豆秋はそのいも虫から偉大な発見をして数多の名吟を残してくれたが、私はまだいも虫の真の姿をつかみきれないでいる。

◎私の知人の或る外人がニヤニヤしながらこんな問いをした「君、ブドウと言う日本字を知っているかい」それはたしかに覚えたものだが今はまさに忘れて、とっさに出て来ない逆にブドウはグレープとしてなら知っているのである、明治百年の半ばを過ぎようとしている私にして日本を見直すことの急務を教えられたような気がした。なお右の外人はブドウの漢字を金釘流もたどたどと「葡萄」と立派に書いて見せ、またニヤニヤしたものである。これはほんの座興的なもので別にもの識り顔をしたさでもなければこちらの無学をやじった訳でもないが脚下照顧とはこれをさすのだろう。

◎私の職務上調べたいものがあったので当地の公立図書館へ行った折時間も少しあったので文学部門で山路閑古氏著の「古川柳」でも見ようと思いそこへ行き、これこれの本の借覧を申し出た処係の人の曰く「ふる川柳」ですかとあった、それはそれで間違いないし、言葉とがめをしようとは思わないが司書学も必要な立派な公立図書館の係員でこれだから川柳を番茶といまだに思われても仕方のない話ではなかろうか。

慈光院吟行

谷垣史好

どんぐり川柳会羽曳野は療養者ばかり、同大阪市はそのOBたちによって結成され、川村好郎先生のご指導をうけている。

このどんぐり川柳会（大阪市）が去る日、奈良慈光院へ吟行した。数氏を除き好郎一門勢ぞろいという和気あいあいのものだった。

脱都会のすがすがしさ、風趣に富む普茶料理の美味、心洗われる一日だった。

普茶料理大和の風は円るかりき　小松園
うでまえを見込んだ弟子に裏切られ　勝恵
一本の外はまとめて持つテープ　奈々
ことづけは梨のつぶてとなって昏れ　修史
慈光院残りつつじも景を添え　好郎
御仏は襖のむこうか慈光院　痴亭
ことづけは露次の干物くぐらされ　雀踊子
ことづけを頼まれたからいる土産　英断

色紙短冊
書画用品
大阪玄びし筆
丹青堂

一本のビールで父の日ごまかさん　紀水
くどかれているとは手腕気がつかず　岳人
手腕家に謀叛の日々が続くなり　いわを
さりげなく愛の一語をことづける　鬼遊
国鉄も借景のひとつ慈光院　酔々
ボウフラのいる手水鉢文化財　吸江
スクラムを解いて手腕家ほっとする　悦郎
終着のない一本の道を行く　之保
一本のきずなへ女身を沈め　弥生
一本の細道夫婦でかばい合い　喜風
手腕衰えて積木が掌にあまる　可動
手腕認められ金策に走らされ　草春
つまずいたはずみことづけ思い出し　比呂路
お茶室へつづくつづじも人を恋い　葉子

一本の傘へ嬉しい肩を寄せ　　史好

ちよっとひと言

—前月号から—

六月号P20の

640　月落烏啼て女房はらを立

の「烏」が「鳥」となり、前田氏の文中も皆「鳥」になっている。しかし、引用句の「月落ち烏啼いて四つ手又盛り」傍三(・33)は、「烏」が正しい。

「烏」は張継の詩の文句取であるが、「鳥」は、それを引用した謡曲「道成寺」「三井寺」等の文句取であるからである。謡曲がなぜ「烏」を「鳥」にしたかは、はっきりしないが、語調の関係などからだろうと思っている。

(室山　三柳)

牛

鈴木　村諷子

(のりこ号廃牛となり売る)

牛撫でりゃ牛が私を舐めてくれ
内証も聞き洩らさぬと牛の耳
牛鳴けば喜怒哀楽を聞き分ける
まっ直にうまやをのぞく旅もどり
鎌祝いのおはぎ牛にも食べさせる
俺が癒り代りに牛が癌になり
頬寄せりゃ牛の鼻息生温し
売牛の哀れや今日の急ぎ足
無情なる男に牛の綱渡す

雅号ぶっちやけばなし (98)

とめこ

小林トメ子

こばやし

小さい時からトメ子と云う名前が大嫌いでした。それは落語でよく熊公留公と呼んで慌て者のおっちょこちょいの代名詞のようになっているのでいやでいやで仕方なかったのです。

だから川柳だけでも格好いい優しい雅号を付けたいと思っていましたが、(会に出席させてもらって未熟な自分を知りまして本名を使うことにしました)夢は一日も早く雅号を書ける日を祈っております。

職業　貸事務所(五十七歳)

▼木曽路の旅は楽しかったです。前列右から五人目が東野大八先生で、この日の柳話には感激しました。(板尾岳人)

小口

恒松町紅選

恩給を小口に出してする生活　暁風
小口でもこんなに増えていた預金　笑風
引越荷小口で届く独りもの　暁風
習いごとどれも小口で娘は嫁ぎ　カズエ
切り小口見せて研ぎ師の腕自慢　代仕男
へそくりの小口隠匿場所忘れ　里風
まな板の小口叩いてよい機嫌　露杖
根まけのかたで小口を契約し　旭童
倖せは小口にためている達者　里風
病人で小口に料理つけ合せ　越子
出しきりの寄進小口で済ましとき　軒太楼
集金の小口が一つ山の上　本蔭棒
ほそぼそと小口仕入れのペタル踏み　春日
セールスの足は小口へこまめなり　重人
ふとどきな小口預金の利子を下げ　敏
配達も忘れて帰るほど小口　木魚
小口なら入る保険は義理があり　英詩
へそくりは小口に妻の貯金帳　祥月
連休は小口金融当てにする　輝親
旧地主小口の方へ名を連ね　伶人
大口を叩いた人が小口寄付　隆子
尊さは小口にあると募る寄付　杜月
へそくりも小口のうちは気づかれず　度
義理でする寄付は小口で顔を立て　利美
大口で使い小口で金を貯め　洋々
開店日小口も受ける低姿勢　昌道
小口注文品切れですと断わられ　止水
断われぬ寄付を小口で逃げておき　好一
貯めている噂小口で済まされず　軒太楼
調理師がテストされてる小口切り　酉合
小口便で故郷の味がまた届き　英詩
ベテランは小口の客を大切にし　国彦
反骨があって小口の味方する　一郎
こつこつと貯めた小口を借りに来る　克枝
小口預金そっと持たせて嫁がせる　杜月
小口にも乗らずギャンブルから逃れ　笑風
滞納の小口へ税吏は容赦せず　笑風
意外にも小口外貨を稼いでる　パット
旅馴れて小口の財布別に持ち　代仕男
小口でも寄った善意を感謝され　止水
ご先祖が小口の端に居た寄進　本蔭棒
佳
小口の荷母の情を秘めてゆき　陽山
大口は別にかくしている小口　重人
銀行の名刺に小口くすぐられ　新之助
束にして小口大きく運ばれる　千翁
故里の味が小口になって着き　洋々
人
投げ捨てるように小口は扱われ　扇水
地

万的
杜的　共著
的
送料共
四五〇円

こっそりと小口に包む左遷の荷　祥月
天
本当は小口の寄付にある善意　素身郎
軸
単身赴任官舎へ届く荷も小口

看板

松本忠三選

看板に偽り多い店がふえ　綾女
看板に誤字を並べて引く人目　七面山
大看板二階の採光権奪い　ろ亭
逆さから横から書いて看板屋　悠泉
御許しの看板貰う金を積み　綾女
変骨という看板は他人があげ　旭童
看板を外してお客でない人に　葵水
看板はそのまま経営者が変り　思月
試験ならバツ看板の字で通り　暁明
字くばりのこつ看板屋にみとれ　カズエ
看板を降ろせば興信所が慌て　扇水
お目当てが有りそう看板までねばり　章雅
看板の嘘鮮やかな色になり　千翁

常連が来て看板とも云えず　翠月
ネオンひとつ残ってここは過疎地帯　古方
看板も新たに若さで勝負する　軒太楼
看板の向き変えさせる道が出来　止水
信用の看板父の太い眉　克枝
倒産をした看板も陽をはじき　扇水
看板の影で遍路は昼にする　暁明
看板に小の字があり巡業先　秀峰
墨が浮く老舗の看板桧板　文三郎
新装へ看板だけは古いまま　初甫
勘亭が上ると京に春近し　国彦
御用達板看板も城下町　カズエ
裏口で看板を待つ自家用車　一郎
無愛想も看板屋台混んでいる　葵水

佳

看板に大物並ぶ二流校　豪城
看板も本家元祖で競い合い　宵明
看板は歩いて五分と書いてるに　里風
二代目の勇気看板ぬりかえる　酉合
誇大宣伝だなと看板屋も思い　素身郎

人

看板は当用漢字でない老舗　素身郎

地

看板の裏見せられる二階借り　木魚

天

仕立物しますと小さく書いて出し　暁風

軸

看板を変えてみたらと云う助言

疑う

小幡里風選

悲しきは疑う自由持つ凡夫　松花
疑えば食うものがない街に住み　旭童
ふと洩らし濁す言葉を疑がわれ　代仕男
言い訳をせぬ口下手で疑われ　和宏
真実を話せば尚更疑われ　鎮也
親切も一応疑う寡婦哀し　佳女
疑うたわたしの記帳洩れでした　一郎
疑いの扉は音もなく覗き　英詩
疑の余地を残してコップ酒　昌道
出張の二泊を妻に疑ぐられ　どんたく
疑いをとく押べをしかとおし　鬼焼
疑いは靴の底まで見るつもり　笑風
疑いの目付きで相槌打ってくれ　止水
時には疑って見る夫婦仲　弘朗
疑いを詫びる寝顔のきれい過ぎ　宵明
算盤をはじいて疑うのをやめる　克枝
言い負けて疑とけぬまま黙り　潮音
疑えばわが足音さえも怖くなり　白汀
あの人がと半信半疑で聞く噂　章雅
生活の知恵で疑う事も知り　輝親
父ちゃんじゃないか疑う目を感じ　暁明
濡れ衣のままで左遷は見送られ　洋々
うたがったままで別れた人を恋い　秋女
弁解をするから疑ってみたくなり　翁童
疑いの妻の目冷たく脊にささり　軒太楼
疑えばこの頃の妻美しい　本蔭棒
美容食女疑うこと知らず　カズエ
つけまつげ鼻の高さも疑われ　豊平次
疑もあると一応レントゲン　杜月
疑を知らず少女の目がきれい　重人
果てしなき疑心が夜着の衿を噛む　露杖
疑いを晴らす自信がある地声　扇水
疑いがこんな仮定を立てさせる　古方

佳

疑いのない結果が物足らず　止水
疑うてはるのと電話長くなり　初甫
この俺を疑う妻の黙秘権　弘朗
インタルゲーションマークへ首ったけの対話　千翁
疑いのまなこではなし冷凍魚　宵明

人

疑問符の中で大人になり切れず　克枝

地

女文字思わぬ濡れ衣着せに来る　潮音

清水白柳遺句集　送料共七〇〇円

天

疑心暗鬼のままお流れを頂戴し　素身郎

軸

裸婦の像白痴見つめている疑惑　里風

初歩教室

――題「泡」――

本田恵二朗

宣伝ほどに立たない泡立器　翁童
（泡立器宣伝ほどに立ちもせず）
泡食った不手ぎわボロを出し続け　同
（泡食ったばかりにボロがこぼれ出し）
公害の川ぶつぶつと泡を立て　越子
（ヘドロいま悪魔の貌で泡を吹く）
阿波鳴戸紺に泡立つ藍の鍋　貞祐
（泡立てて鳴戸の渦のなに憶う）
待つ人もおそくビールの泡も消え　杜月
（待ち人はまだ来ずビールの泡を吹く）
泡一つ金魚ゆっくり向きを変え　本蔭棒
（泡一つ吹いて出目金欠伸する）
泡吹いて吹いて小蟹の構えたり　秋女
（蟹の恋泡吹きおうて吹きおうて）
口角をとばす男のうすい唇　同
（泡とばす男のうすい唇よ）
大宇宙の泡の地球の貧富の差　度
（大宇宙の泡の地球にある貧富）
泡沫のように新人出ては消え　同
年老いて理想いまさら泡と消え　富喜子
（年輪のかげで理想が泡と消え）
口角泡とばしておいて泡のよう　頼次
（口角の泡ほど反響現れず）
赤軍派泡と消えた革命の夢　つね
（赤軍派革命の夢泡と消え）
口角泡談交猛き声　三十四
（口角泡団交徹夜の構えなり）
あれまでに世話してやって水の泡　生仏
（世話好きの泡になろうがなるまいが）
泡沫と消えた初恋なつかしい　シゲ
（泡のように消えて初恋美しい）
盛りあがる泡に急いで口をよせ　同
（ジョッキの泡顎つき出させつき出させ）
栓を抜くビールの泡へ初夏匂う　孝華
（湯上りのビールの泡に初夏匂う）
泡食っても蟹は自性の横に這い　まさひろ
（泡食ってもやっぱり蟹は横に這い）
白い泡えがいて滝にいどむ鯉　志津
（滝の泡掻き分けるように鯉いどむ）
泡立器リズムに乗った使われよう　重人
（泡立器新婚というリズミカル）
形勢不利口角泡をとばしとり　同
（負けそうな方が口角泡とばす）
泡出して蟹がつぶやく一人言　露芳
（泡吹いて小蟹は何をつぶやくか）
倖せを抱いてシャボンの泡の中　豪城
（倖せな乳房とシャボンの泡は知り）
泡食った受話器逆さに摑まれる　同
口に泡とばすところが買われてる　同
泡立ては母が実演娘の料理　茂美
（泡立ては母が手伝う娘の料理）
サイダーの泡より淡い恋芽ばえ　同
交番は泡を吹かれて泡を食い　隼人
（泡を吹かれてお巡りさん泡を食い）
入浴で一風呂あびて泡流し　秀村
（一と風呂で今日の疲れを泡にする）
白き泡も心の汚れまで取れず　比呂路
（シャボンの泡よ心のしみを消しとくれ）
大ジョッキ泡までなめてまだ足りず　進
熱帯魚水藻のかげで私語の泡　まるゑ
泡のはかなさに自分を置いてみる　静泉
泡だけを残し一気に夏を飲む　同
石けんの泡にロマンの詩を追う　露杖
泡の手で倖せきずく背を流す　京子
公害へ苦情を申す蟹の泡　酉合
泡盛りの酔いが引き出す武勇伝　同
泡盛りの酔いが不満の導火線　慶彦
泡沫の恋に身を焼く夏の虫　同
ビールより泡を売ってるビヤガーデン　誓二
アル中がへそくりまでも泡にする　陽山
屠場の途と知らずや勇む泡の息　藤持
洗濯機隣りの溝まで泡だたせ　繁子
口角に泡の論争宙に浮き　濁水
泡立たぬ出で湯へ石鹸もどかしい　弘生
水泡に帰すともやったという安堵　同
酸素吸入の泡へ祈りが凍りつく　カズエ
泡沫に似る人生を泣き笑い　同
今回は中々好調だ。このペースで進もう。
半分は泡で金とる生ビール　好一
泡ばかりたててやもめのお洗濯　同
シャボン玉消えゆく空にいのち観る　千夏

悔いもせず泡ばっかりを追っている　同
泡食ったようにニセ医者逮捕され　静観堂
春の川けつまずいて泡流れゆく　同
（春の川泡けつまずきけつまずき）
抵抗は無駄と知らない蟹の泡　利美
赤ちゃん機嫌治った泡だらけ　同
あくまでも主張を曲げぬ口の泡　同
公害の泡がテレビできれい過ぎ　止水
口角の泡を偽善者拭き取らず　同
カステラという名で卵の泡を食い　同

川柳というものに興味を持ったという動機は人それぞれに、色々なものがあろうが、それぞれの人生に大きなプラスを見つけたことになると私は断言する。ただ川柳の本当の心はどこにあるのかということを間違わないようにしないとプラスになるはずのものがマイナスになるおそれがある。そのためには、それぞれの心の内容を豊かにしたり、温い環境を作る努力が大切である。豊かな心や温い環境から生れた句は、それを読む人へほのぼのとしたものを与えるであろうし、自分自身の人間性も陶冶されてくるであろう。

心の内容が貧しくなってくると、段々と川柳が生れにくくなって、遂には息切れを感じて川柳の列からドロップしてしまう。そんな例を沢山知っているから、そうなってはならないと警告をしたくなる私である。或る点まで進歩すると内心川柳家に成ったような気になって、心の内容補給を忘れはてる例を知っている。そうなると作句はしても、内容が貧しいので佳吟は生れなくなる。内容が無くなると、やたらにフイクションした句で、われも人もあざむくようなことをしようとする。

それは人間性の低下であって、人生のマイナスとなるにちがいない。思索という陣痛によって生れた句には血が通っているのだと信じて、その陣痛に耐えねばならない。その陣痛を多く体験した者ほど好作家に成長されている。この教室のみんなが好作家に成られることを祈りつつ駄弁のペンを置こう。

題――耐――七月二十日締切（九月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井三五二　〒七一一　**本田恵二朗**

雅号ぶっちゃけばなし（99）

けんぽう

岡田　拳法

おかだ

私は縁あって少林寺拳法に青春をつぎこみました。旧制中学二年の夏、父をガンで亡くした私は、総領として弟三人と母を励まさねばならない位置にありましたが、「一生懸命やっていればなんとかなるよ」としか言えなかった私にとって、拳法の演練や実戦を通して体得したものは、判断したり決定する時、安心して計れる唯一のものさしとなりました。勿論いつもうまく行くとは限りません、遠廻りしたり躰をこわす結果にもなりましたが、そのお蔭で「岩田ひさお兄」を親友に持てたし、川柳に縁ができ川柳塔社のお仲間にもなれたのです。拳法はどんな時でも私と共にあるだけでなく、私そのものである次第です。

★堺・松江・木次・若芽合同句会

七月六日午後六時から八木摩天郎宅で開催

兼題「続く」「徹夜」「友」「紙」（堺市農協出題は「友」農協情報掲載、各題三句。（席題はありません）

島根柳人と堺川柳会が合同で友情を結びます。閉会後は柳談、懇親。

翌朝午前九時に堺出発、高野登山。霊山で心を洗い、午後六時からの川柳塔社路郎忌句会に出席します。

★

八木摩天郎著「堺つれづれ草」と「古川柳に詠まれた堺の人々」が大阪市立博物館蔵書図書となる。柳書としてはこれが最初。

第二百五十二回（四十七年度第六回）

大萬川柳「つつ抜け」

入選発表

選者　川村好郎

投句総数　六百八十句

入選　六十七句

大阪　葉子
屋台までつつ抜けていたボーナス日

大洲　暁明
つつ抜けは承知心にないお世辞

松原　史好
つつ抜けの情報まゆつばも混り

倉敷　梁水
つつ抜けも覚悟の上という苦言

鳥取　静泉
つつ抜けになった話がくい違い

羽曳野　可動
隣りから生活の音がつつ抜ける

堺　天笑
難聴へ騒音だけがつつ抜ける

大阪　清女
つつ抜けの耳でありたい日の苦悩

宝塚　静馬
おばはんの特ダネ路地中つつ抜ける

岡山　止水
つつ抜けにする情報へついて来ず

富田林　維久子
つつ抜ける事を知っての電話口

大阪　十止庵
もう知っている町内を走り抜け

大阪　克美
つつ抜けになってる妻の瞳が笑い

神戸　牧人
つつ抜けの耳へ叱言のくどいこと

岡山　川端柳子
つつ抜けになりそう相槌打ちかねる

今治　昌道
つつ抜けた言葉の裏をさぐられる

倉敷　克枝
つつ抜けと知らず実弾さげてくる

富田林　弥栄子
ここだけの話へブレーキない女

大阪　保夫
つつ抜けをただ雑音と聞き流し

今治　有里
つつ抜けを逆手にとって泣きっかれ

東大阪　弥生
つつ抜けの噂がこわい寡婦ありて

大阪　修史
つつ抜けの壁に温みのある長屋

大阪　賛平
つつ抜けが来たのでみんな黙り込み

大阪　生仏
何もかもみなつつ抜けの村に住み

島根　芳子
つつ抜けて肚の据ってきた女

富田林　美代
つつ抜けの反応待っている構え

堺　一二三
冷戦のニュース舌足らずの児が運び

倉敷　千翁
つつ抜けは手真似も添えて持ってくる

大阪　新之助
貸さぬのでつつ抜けだったことを知り

堺　青香
つつ抜けを追えば女に行き当り

倉敷　里風
つつ抜けにわめいて女譲らない

倉敷　素身郎
つつ抜けの罪を多弁が負わされる

笠岡　忠三
つつ抜けがまた材料を仕入れに来

宿毛　窓花
先廻りしてつつ抜けていたショック

和歌山　葵水
つつ抜けてからは他人としての距離

横浜　豪城
つつ抜けと知らぬ雄弁冴えている

大阪　章雅
つつ抜けの女と知って利用され

西宮　百酒
つつ抜けを承知で不平さらけ出し

八尾　酔々
栄転の噂社宅をつつ抜ける

倉敷　扇水
朗報を妬みとなって云いふらし

岡山　久米雄
性こりもなくつつ抜けへまた話し

尼崎　徹也
つつ抜けを暗に制した咳ばらい

大阪　文秋
つつ抜けになっているのにまだとぼけ

兵庫　可住
計画が洩れて腹心うたがわれ

つつ抜けを楯に悠然構えられ

つつ抜けの手応えなさが無気味なり

富田林　花梢
つつ抜けの仲にも一線ある他人

大阪　誓二
便笺の裏まで思慕がつつ抜ける

大阪　万里
何もかもつつ抜けていく嫁の里

つつ抜けてからうろたえる善後策

大阪　白水
日米の密約つつ抜けした波紋

つつ抜けの裏をかいてる捜査網

富田林　岳人
つつ抜けた話隣りへすぐ廻し

つつ抜けた話へ栓をして廻わり

鳥取　豊生
つつ抜けにされる範囲で話しとき

駄目だったらしい隣りの鳴咽聞く　呉　英詩

つつ抜けが気にもならないマイペース
つつ抜けと知らない嘘を聞く笑い
佳　句　宝塚　静馬

すかたんを聞いて早耳ふれ廻り
尼崎　利美

お隣りへつつ抜けですと妻が折れ
岡山　白水

つつ抜けてよい善行はつつ抜けず
倉敷　八笑人

つつ抜けの両端にいる好敵手
つつ抜けて喜劇の主役にされている
人ノ句　大阪　誓二

もう知れたかと嬉しい電話口
地ノ句

兵庫　可住

つつ抜けのどこかで女の笑う声
天ノ句　和歌山　太茂津

聞きたくないつつ抜けへギター弾く
選者　吟

口止めをしたのも一緒につ抜ける

第五回「家」の入選句訂正

借家から抜けでるプランばかりたて
右の句は佐々木静泉氏です。

土地買うた家を建てたと姦しい
庭もなし山も見えぬが俺の家

この二句は和歌山、太茂津氏の句でした。訂正おわびします。（好）

昭和四十七年度ベストテン（五月現在）

一	**里風**	一一、〇	倉敷
二	**吸江**	一一、〇	藤井寺
三	**弥生**	一一、〇	東大阪
四	**英詩**	九、五	呉
五	**太茂津**	八、〇	和歌山
六	**可住**	八、〇	兵庫
七	**美代**	七、五	富田林
八	**白水**	七、〇	岡山
九	**修史**	七、〇	大阪
一〇	**梁水**	七、〇	倉敷
一一	天笑	七、〇	堺
一二	水客	六、五	大阪
一三	静馬	六、五	宝塚
一四	筒子	六、五	倉敷
一五	酔夢	六、五	香川
一六	葵水	五、〇	和歌山
一七	牧人	六、〇	神戸
一八	可動	六、〇	羽曳野
一九	瑞枝	六、〇	米子
二〇	重人	六、〇	大阪
二一	一二三	六、〇	堺
二二	利美	五、五	尼崎
二三	克枝	五、五	倉敷
二四	忠三	五、五	笠岡
二五	智司	五、五	大阪

以下略

昭和四十七年度第八回
「鈍行」五句以内
締切　七月二十日

第九回
「糸」五句以内
締切　八月二十日

投句先
大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社内　大萬川柳係

川柳塔社常任理事会

（六月三日）

議題は路郎忌、木曽路の旅、それと本年の大阪市文化祭川柳大会は川柳塔社の当番のため、これらを中心に検討した。

出席―薫風・生々庵・古方・万的・形水・文秋・一三夫諸氏。

▼同人消息▲

▼浜野奇童氏は〝弓削川柳社〟の会長に就任された。

▼橘高薫風氏は七月九日（日）開催の「いづみ」「川柳春秋」「せんば」合同吟行句会の兼題「橋」の選者として出席。場所は姫路郊外・塩田温泉塩田荘。

▼本田八笑人氏（倉敷市）は夫人同伴で本社六月句会に出席。

▼小浜牧人氏（神戸市）の住居番号変更。神戸市東灘区森南町一丁目13番7号。

▼林野甦光氏（呉市）の電話。（電0823・23・3089）

▼河内天笑氏、谷垣史好氏、江城修史氏は本誌発送日にはかならず応援にくる人たち。発送後のコーヒー片手の柳談がスゴイ。未公開封切裏ばなしが好評。

▼児島与呂志氏（大阪市）は〝川柳大阪〟復刊後、再建途上にあるので、必死の奮闘中。

▼水谷竹荘氏（大阪市）も〝川柳烏ケ辻〟再開後は機関誌発行に熱意がほとばしる。

▼菊沢小松園氏（副理事長）は白柳氏没後、大わらわの活躍で、周囲の人がハラハラ。

▼小西無鬼氏（兵庫県）老いをはね返えす努力をしながら目下苦吟中。

☆柳界展望☆

写真はロスのつばめ川柳社の句会風景、
後方の四枚の額は生々庵主幹寄贈の句で、
これは天位入賞者に贈呈された。

担当　橘高薫風

▼中島生々庵主幹ご夫妻はアメリカからの帰国早々の六月二十五日麻生葭乃先生を訪問、土産話やら、ハワイの築山快夢起氏らの伝言を伝えられた。

▼平安川柳社創立十五周年記念募集論文の最優秀作は「これからの川柳」は東京都の山村祐氏と決定、作品の部の受賞者ともに、五月二十一日の川柳大会当日、表彰、賞状・賞杯・賞金を受けられた。作品の優秀賞は「鶴を折るひとりひとりを処刑する墨作二郎」「青年の瞳になり種をまいている岡崎徹平」「疑いはせぬが夫が掌を洗い角田辰男」「裁かれにゆく日の胸にある造花山本裕一郎」「母と歩いた小径通って母の墓越智禎」「すこし寒い軍歌の中の男たち定金冬二」「その髪の長さにつづいている枯れ野前田一石」

▼第十四回花童子賞入選作品第一席に函館市の山内幸枝さんが入選された。花活けて花に心をのぞかれる他五句が対称になった。第二席は函館市の東海宝船氏、第三席は砂川市の大橋政良氏と函館市の小山翠子さん。

▼川柳「路」創刊百号記念（五月号）は昭和四十七年四月十五日川柳路吟社から発行。また六月号には百号記念第二回誌上川柳大会を発表、藤沢三春氏が第一位を獲得された。

▼第十五回近県川柳大会（竹原市）は九月三日（日）午前九時から竹原福祉会館で開催、兼題、船・抵抗・しっぽ・民族・裏・学歴・ポケット・塔・輪、各題二句、会費五百円（発表誌、記念品、軽食代）、投句は巾三糎長さ十九糎の句箋を使用、裏に雅号を明記して八月末日までに〒725竹原市竹原町田中山内静水宛送付のこと。

▼第二十四回西日本川柳大会（弓削）は九月十日（日）、岡山県久米南町弓削小学校講堂で開催、兼題、償う・音・庶民・フィーリング・ドラマ・競う。本社から西尾栞氏が選者として出席される。

▼第八回埼玉川柳大会は七月三十日（日）午前十時から埼玉県立労働会館大講堂で開催、兼題、その上・皮・どっちもどっち・今日の夢・暇つぶし・お蔭さま・冷やす、（各題二句）手十吟、味つけ（一句）、投句は手十吟をのぞき三百円を同封の上、七月十五日迄に〒336埼玉県浦和市常盤九の十四の六武藤かめ吉方埼玉川柳大会事務局宛。巾三糎長さ二十三糎の句箋を使用裏に題名を書くこと。

▼かがみ句会は七月二日午後一時から池田古心居で、兼題、半夏・半ソデ・薬害。八月は二日午前十時から奥津温泉マス釣場で、兼題、料理・汗・器用。

▼「原爆一千人句集」が公募されている。投句は原稿紙半截に一人五句、氏名年齢職業を明記すること、その年の参加作品は「手毬」八月号に掲載、一千名達成の時点で単行本「炎上の街」を刊行。投句は二百円同封の上、七月三十日迄に〒730広島市上幟町十一の三、手毬吟社宛。

▼下関川柳大会は川原菊水氏退職記念を兼ねて、八月六日（日）午前十時から下関市火の山「海関荘」で開催、兼題、愛称（中村九呂平選）・汽車・建売り・魔女・荷物・落書（浜田久米雄選）・髪・史蹟・腹芸・勤続、各題二句、締切りは七月一日、投句は〒750下関市関西町二一八七川原菊水宛。翌日、秋芳洞、秋吉台、青海島などの観光がある。

▼川柳なごや四百号記念川柳大会は十月二十九日（日）午前十時から名古屋市教育館二階ホールで開催、兼題、勢揃い・四天王・交流・鯛・妻の顔・マナー・菊・祝詞・雨と風・スクラム・伝統、席題一題、各題二句。会費五百円。

▼川柳作品五人集「甍」が平安川柳社十五周年記念大会の当日の五月二十一日に

疲労回復・肩こり・神経痛に
アリナミン®A
☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で
タケダ
㉘

京都市中京区姉小路通柳馬場西入ル平安川柳社から発行になった。福永清造・伊藤入仙・西沢青二・田中秀果・北川絢一朗五氏の十年間の集大成。B6版二百九十頁、定価九百円。

▼吉永川柳社の赤穂御崎吟行は五月二十日寿屋別館で

▼第七回郵川連中国ブロック大会は五月七日（日）下関市の海関荘で。

▼第十八回愛媛川柳研究大会は五月七日（日）今治市桜井海浜倶楽部で開催。

▼直原玉青画伯指導の第十一回青玲社日本画展、（併催直原玉青中国回想展）は六月十三日（火）から十八日（日）まで大阪梅田阪急百貨店七階催場で開催。中島生々庵主幹は、「山荘」を、小石さんは「東山の秋」を出品、河村瑞川氏（大阪市同人）は「椿」と「山水」の二点、岸本豊平次氏（守口市）は「風景」を出されてそれぞれ好評を得られた。

▼平安川柳社十五周年大会の終了後、菊沢小松園、西尾栞、三井酔夢、高杉鬼遊、香川酔々、河内天笑、有信新之助、板尾岳人、同夫人、薫風の十名は伊藤入仙氏の店「木戸」で「これからの川柳」について語り合った。

▼若本多久志氏（西宮市）はまた〃左きき〃をラジオで放送された。

▼川柳岡山社主催の訪米川柳団に加わって、本社同人の浜田久米雄・岡村久志良・羽原静歩の諸氏が五月三十一日午後六時羽田発のジェット機で鹿島立ちをされ六月十四日帰国された。薫風が新大阪駅へお見送りした。

▼浜田久米雄氏（岡山同人）から、「ノースウエストのジャンボは、現地時間五月三十一日午前十一時シャトル着、入国手続の後再び塔乗、午後六時過ぎシカゴへ第一歩を印しました。機中の睡眠不足を一夜で解消し、今日六月一日は市内見物、バッファロー経由ニューヨークへ向います。」

▼羽原静歩氏（守口同人）「機内より見た雲海の美しさは唯驚くばかり。」シカゴの夜は野尻南海氏の招待で中国料理をよばれる予定

▼渡辺乱坊氏（鳥取同人）と三朝の大陸同窓会の打合わせに行かれた大井正夫氏から、出席申込みが百四人の多数になったと。

▼大谷月都氏（愛知同人）は新工場増設、決算などで多忙。大阪へは月に一度出張しますから、ひょっこりと本社句会に出てみたいと

▼尾緑之助氏（出雲市同人）は句碑建設の下検分に出雲、松江の同人諸氏と日御碕灯台へ。

▼吉岡通児氏（松江同人）から「下関に来ております。昭和四十八年十月に完成という関門大橋の下の宿で金波銀波の海狭を通る大小の船を見ながら句境に浸るのもまた格別です。」

▼米沢暁明氏（大洲市）は滑床自然公園から―水清し新緑もよし景もよし―と旅吟。

▼小川静観堂氏（伊丹市同人）は当年八十三才。「たいして身体は弱ってもいないのに嫁が心配して独り歩きをさせてくれず、」と句会に出られぬ身をかこっておられる。「弟の方が烈しい孫を抱く」

▼八木千代さん（米子市同人）は東名高速を車で往復して疲れて帰ったのに、また引続いて広島へ。お孫さんの誕生と、ご長男が早稲田出のお嬢さんとの婚約。うれしい多忙とのこと。

▼森井菁居氏（竹原同人）は、五月二十二日に男子出生、信吾と命名された。

▼西尾栞氏（八尾市同人）は平安六月号（十五周年記念号）で「鑑賞と姿勢」と題し、前号作品の批評を執筆された。

▼大阪市文化祭川柳大会の打合わせに六月八日薫風出席。詳細は後日発表、本年は川柳塔社の当番である。

▼**南大阪川柳会**―七月二十日午後六時―題・白紙・平社員・曲る・横取り―会場松崎町二丁目以和貴荘。

▼**南海川柳会**―七月二十日午後六時―題・待合室・浅はか・鍵―会場、南海電鉄本社食堂内。

▼**川柳東大阪**―七月二十二日午後六時―題・あくび・家柄・難波・テスト―会場永和駅前東大阪市民会館。

新同人紹介

体育教諭　川上久司

―十郎・太茂津・葵水推薦

本社六月句会

会場　以和貴荘
六日　午後六時

倉敷から本田八笑人氏、京都からいさむ氏、和歌山から葵水氏と太茂津氏、奈良から本蔭棒氏、兵庫から多久志、静馬、牧人諸氏など遠方からのご出席があって六十二名、地元の方々からちょっとご協力ねがえると八十人や百人は軽いのですがね。

多久志氏の柳話はスランプをどうして克復するか——。

作家は商人と同じで、商品を売りつくしてしまえば商品を仕入れねばならない、作家も作品を全部出してしまえば句が作れない。スランプはそんな時、突然おそってくる。

そこで仕入れが問題である。古いモノでは売れない、新しいアイデアがのぞましい。それには着想の奇が必要である。この奇は川柳以外の天地から求めるのだ、そこに新しいアイデアがわいてくるものである。

この路郎先生のご遺訓は、われわれかつての不朽洞会員は耳が痛むほど聞かされてきたのである。

ミス日本足の裏まで美しい　路郎選。

二十年以上の作品だが「女の足のうら」はもう古句に近いものになっている。

小松園氏の欠席で生々庵主幹が代選。熱の人、竹中肖二氏が見事この日のヒーローとなり、月間肖杯を手にされた。（F）

（河井庸佑整理）

席題「モーレツ」　本田八笑人選

モーレツな奴だと言われ今こそは　儀一
モーレツな社員に成れず詩をつづり　与呂志
モーレツにはりあったライバルにある友情　水京
モーレツ重役黒い旗振る責めに立ち　水客
モーレツと手真似他人のことだから　葵水
モーレツに押され万策尽きてくる　いさむ
モーレツな娘に育てたとは知らず　一二三
モーレツをよそに今日食うだけの汗　庸佑
モーレツ社員ふっと自分にたちかえり　本蔭棒
モーレツへやれホルモンのビタミンの　恒明
もう死語となったかモーレツ口にせず　一舟
モーレツな社員に椅子をゆさぶられ　水客
モーレツという言葉尻ひくくする　徹舟
悪どさもあるがモーレツだけを買い　滋雀
モーレツな攻め手棋盤へそっと置く　生々庵
打ち上げ花火でもよし青春の夢はげし　秀信
モーレツな闘志から振りくり返す　凡九郎
やけくその悲鳴にも似るモーレツさ　天笑
ひ弱さをかくすモーレツとは知らず　あいき
モーレツが消えて変身がのさばる　天笑
無器用を悟ってからのモーレツさ　宣介
ナンバーワンの髪は真っ赤に炎えている　太茂津
モーレツな理論に足許浮いている　柳宏子
下剋土もありモーレツ会社揺れ　君子
猛烈社員も時には脱サラ考える　水京
モーレツにやりあった後の酒の味　一三夫
モーレツともいわれゴマスリとも言われ　恒明
モーレツ社員私腹をこやしてる　柳志
モーレツ教師案外PTAにもて　古方
モーレツに生き島国に生き残る　葵水
モーレツさ欠けて六法繰る自衛　夢成
モーレツな娘の好きな赤い服　悦郎
モーレツを自慢に小さな殻にいる　夢成
レモン浮かせてモーレツ娘の嘘をきく　八笑人
あきらめて走ればモーレツだと言われ

席題「名　札」　神谷凡九郎選

ふりがなで読める名札にほっとする　恒明
汚職した議員も差別せぬ名札　一二三
信念を通す名札が僕にない　八笑人
名札へ素直でありたいと思う　夢成
名札つけて貰う受付の顔なじみ　水客
売約済みの名札蝶の胸の中　葉子
名札忘れて名をおぼえられ　あいき
迷子札泥にまみれたまま呑れる　柳宏子
何処までも流儀が付いてくる名札　新之助
色っぽくなって名札が替ってくる　葵水
連休がすんでも歯抜けの名札掛け　静馬
今に見ろ見てろと名札今日も拭き　八笑人
今日からは名札をつけてサクラ組　多久志
名札だけとればおなじの傘の色　好一
犯人も同じ名札をつけていた　庸佑
それぞれの名札小さな植木鉢　重人
病室の名札が消えた寂しい夜　静香
名札もう覚えられてるオチャッピー　葛城
名札斜めにずれ実力派の社員　八笑人

葬儀委員長という名札でもそり返えり　生々庵
名札つけられて転がされた事故現場　古方
孤々の声名札の生命新しい　太茂津
滝近く原生林の名札読む　水客
名札の一団が公害のただ中へ来る　水客
下っ端に過ぎぬ名札にある序列　牧人
少年といてとおい日の名札みる　夢成
群衆の一人にすぎぬ名札つけ　新之助
今日から学校今日から学校名札みせまわる　凡九郎

席題「夜ふかし」　正本水客選

夜更しの好きな友達今日も来る　万里
夫唱婦随夜更しという家風　多久志
夜ふかしも屋台の酒がちゃんと待ち　たかし
夜ふかしを犬も知ってか吠えて来ず　維久子
ラーメン屋思う今日は寝てはるらしいです　凡九郎
商談という夜ふかしのサロン焼け　本蔭棒
終電が過ぎても散歩帰らない　静馬
結論は出ていて夜ふかしする労組　吸江
夜更しの窓は違った灯がともる　太茂津
夜ふかしの煙草の煙しのびこみ　茂美
夜ふかしが続いたと見えぬ仕事ぶり　水京
テレビの音小さくして夜ふかしの準備する　茂美
夜ふかしを気にしないほどまだ若く　古方
夜がふけてテンポが早いペンの音　重人
夜ふかしの宿へ蛙が鳴きに来る　岳人
夜ふかしに妻のあくびが気に入らず　花梢
夜ふかしを叱る妻もう妊もらず　葵水
更くる程に男ばかりの唄になり　柳志
故里で夜更しのくせもてあまし　あいき
夜ふかしへ金も体もよう続き　徹舟
夜ふかしに風呂の種火がゆれている　花梢
夜ふかしの帖尻あわす肩たたく　水客

兼題「父」　児島与呂志選

つまずいた父の小石は避けてゆき　一栄
口ほどにない父さんの叱りよう　芳子
父に似て蚤の夫婦に甘んじる　多久志
父が洒落る時異性の匂いする　君子
父と娘の対話へ母が介添えし　百酒
定年へ強がり言う父の影淋みしい　金三
父の眼の黒さへやっと家が建ち　弥生
この父にこの母がいて家内無事　史好
豹変の父の優しさに従いてけず　水客
花嫁の父としロビーの外にいる　葵水
父親の口ぐせ今の若いもの　一二三
俺について来いだった父を語る　三十四
嬉しさを父は素直によう出さず　柳宏子
ひと言で静かになった父の声　滋雀
転んでも父は見ぬふり知らぬふり　静馬
父の座にどっかり父がいる安堵　牧人
妻や子の知らない芸を父はもち　竹荘
おねだりへ父の返事が頼りない　金三
朝だから父は黙っていて怖い　宣介
父と娘の歩巾平行線のまま　葵水
晩酌に別人の笑顔だった父　生々庵
妾宅で逢うた親父艶やかさ　与呂志

兼題「歯」　西田柳宏子選

教育ママの歯ぎしりつづく子の不出来　一栄
歯並びが少し変った歌手売れる　明陽軒
部分品のようにはずして義歯洗う　どんたく
歯並びのきれいな口がよくしゃべり　清女

出席—本蔭棒・徹舟・一舟・滋雀・たかし・肖二・柳宏子・文秋・秀信・水京・好郎・静馬・瓢太・綾女・花梢・柳志・吸江・凡九郎・与呂志・竹荘・フジ子・酔々・悦郎・古方・水客・好一・慶之助・儀一・一三夫・重人・一二三・八笑人（倉敷同人）維久子・天笑・百酒・生々庵・新之助・牧人・茂美・太茂津・岳人・三十四・葛城・いさむ・宣介・庸佑・夢成・葵水・多久志・薫風・静香・君子・金三・万里・弥生・栞・恒明・史好・鬼遊・あいき・敏・葉子。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
高
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

東京都　池口吞歩

核家族当にはしない児を育て　遺産には目の色変えて核家族
民主主義猫も杓子も核家族　核家族もう忠もなし孝もなし
死ぬ時はどうせ独りさ核家族

初孫の前歯二本がやっと見え　維久子
歯並びの良さも審査の点に入れ　瓢太
頼んでも抜かぬ歯医者の白いひげ　新之助
楽になる約束で歯医者身がまえる　生々庵
歯医者から戻りあいつは下手糞だ　宣介
歯が痛みニセ医者にでも口を開け　藤持
気持良う欠伸も出来ぬ総入歯　静馬
うぬぼれが歯の浮く声にしてやられ　一舟
倦怠期歯痛ぐらいはほっとかれ　一舟
下手くそな入歯人相までも変え　花梢
四十過ぎ歯を食いしばる日がつづき　牧人
アーンして内科でむし歯見つけられ　天笑
善人の歯をむき出しに笑いこけ　滋雀
若さの陽はじく衣をきせない歯　凡九郎
石コロになって歯止めになってやる　八笑人
ハンドルの疲れを浮いた歯が教え　新之助
しくしくと夜っぴて泣いた子の虫歯　葛城
お見合いの八重歯可愛いいなと思い　牧人
昇進へ歯の浮くような世辞が来る　本蔭棒
他人事と思えぬ程に歯がゆがり　洸一
歯車の一カ所狂うている善意　与呂志
金歯よく笑い儲ける自信みせ　竹荘
定年の朝念入りに歯をみがく　酔々
歯型まで入れさせ愛をたしかめる　一三夫
おやしらず抜く日の椅子がきしむなり　静香
歯切れ悪い答えは善処すると逃げ　一二三
歯に衣を着せてちょっぴり皮肉られ　洸一
禁煙を誓うて今朝の歯をみがく　生々庵
歯には歯の強気に覗くすきま風　滋雀
抜歯して妻に少さく嘘を言う　夢成
歯を抜いたおしゃべり真先き寝てしまい　弥生
よく見れば歯のない埴輪お人好し　酔々
きれいな歯きれいな嘘をまとめ上げ　生々庵
立ちあがるときの男にある奥歯　水客
根性は総入歯する役作り　柳宏子

兼題「港」　橘高薫風選

カップルへテープの虹がかけられる　一栄
郷愁の港が見えぬビルが建ち　正朗
港町店には鯛の目が光かる　野迷路
来て見れば歌のとおりじゃない港　豪城
逝く年を汽笛に惜しむ港町　豪城
赴任する分校港のない離島　章雅
潮の香を忘れさせてる港町　葵水
港の灯見えなくなって部屋へ入り　徹舟
ほらそこが港だ未練断ちなさい　八笑人
公害も文化も港へ積んでくる　清女
昼さがり老漁夫一人居る港　好一
出船入船ドラがテープが人生が　凡九郎
港の灯泣かぬ女をこしらえる　夢成
船長の頬がゆるんでくる港　酔々
港へは船より妻が先に着き　柳志
足どりは港でポツンと切れたまま　肖二
干魚もまばらに過疎の港町　好一
港湾スト港にいつもの音が無い　静馬
酒の匂いさせて仲仕の港スト　葵水
日本の軍歌を知っている港　夢成
唄にだけ情緒残した港町　百酒
ありたけの旗も目出度い日の港　古方
男ひとり拗ねて生きてる港町　史好
ドデカイ希望ドラもドデカク鳴り響く　凡九郎
どしゃぶりの港へ恋を捨ててくる　天笑
小走りの港を持たぬ女かな　水客
フリーパスねずみ堂々上陸す　多久志
人生の縮図港の職に生き　花梢
それぞれのドラマ港にある艀　重人
漁夫帰港昨日の顔と今日の顔　悦郎
魚臭の港へ女心を捨てくる　竹荘
北洋の漁港ともしび凍らせる　悦郎
汐騒の中に港の呼吸見る　与呂志
港のない島が日本に還ってき　水客

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

激化する港湾ストへ船静か　文秋
捨てるべきもの多かりき港の灯　八笑人
蟹の眼に映る汚れた港町　悦郎
絵にしても魚の臭いのする港百酒
港女夢二が好きな景だった　明陽軒
油が浮いて死ねそうにない港水客
密航へ港はいやに騒がしい　肖二
孵の子港まつりへ靴を履き　牧人
その錆の凍てよりきびし軍港に　薫風

兼題「時」　中島生々庵選

時をまつ二人他人の顔をする　野迷路
時の皺見せて老妓はつま弾きぬ　どんたく
晩成を信じて時をやりすごし　一栄
女房もろてよかった何もかも安い時　静観堂
返答へ時を稼いだ妻楊枝　芳子
時を得ぬ実印荒らく使われる　豪城
看板を塗り替え時流に逆らわず　軒太楼
その次の言葉に時を稼ぐお茶　花梢
会者定離このひと時をあたためる　滋雀
時々の乱れへ女花活ける　弥生
時の重さよ法律に時効あり　薫風
松籟に時の過ぎゆく音を聞く　史好
二人きりの時間へ不粋やってくる　文秋
男あり潮時に背を向ける　水客
妄想を断つ時風が見えてくる　夢成
時利あらずピエロになっている　史好
おみくじが時期を待っょう言いはった　徹舟
トイレまでメモ帖がいる時の人　与呂志
空間と時間の果てをフト思い　本蔭棒
ええ時もあったが度胸ついて来ず　重人

歩いてる時公園は二人のもの　葵水
終戦の日から時間止まっている閣下　史好
手の内に切札を持ち時を待つ　牧人
マスコミの虜となって時の人　好一
愛憎を時の流れが消してゆく　あいき
時かせぐ握手とおとこ気付かせず　水客
格子なき牢獄だった時効の日　新之助
愛終る時犯罪の影を負い　葵水
時間通り来れば早いと冷やかされ　葛城
燃えている二人に時のないロビー　花梢
角砂糖二人へとける時を待ち　柳志
あの時の話になって座が白け　好一
時が時だから化石の像作る　葵水
軍歌唄って時間の外を歩いてる　夢成
決断の時がないまま夕暮れる　重人
時の人時の流れに棹ささず　岳人
時かせぐ相手は一枚上だった　吸江

逢う時の女に憎い知恵が出る　牧人
倖せと気付かぬうちに過去になり　柳志
大ピンチ監督ゆっくりタイムかけ　万里
脚色のない人生の時刻む　恒明
時の人過去知る友をけむたがり　静馬
うつむいた時に女の悪だくみ　肖二
幾万年無雑作底なし沼の詩　生々庵

☆

明日香村から

安住の顔で壁画にいる美人　藤岡　花梢
オーデコロン一夜限りの香をのこし　小松園
牧草の香野良着と家に着き　和田維久子
瞳に青葉香る飛鳥雨しずか　浜田　儀一
妻と来て庭の魅力に妻忘れ　板尾　岳人
ふるい町のふるい壁画の鮮かさ　河内　天笑

一分間の柳論

吉岡逓児

川柳をつくる場合、非常に神経を使うことの一つに、〃ことば選び〃がある。それといま一つ大切なことは、〃字選び〃である。ちなみに本誌四月号、水客氏の巻頭句「ひとりの兵士がインタビューをとまどわせ」が、いみじくもその典型として浮んでくる。「一人」の兵士でも意味は十分理解でき、途惑わせでも難解ではない、しかし孤独感を出す場合「一人」より「ひとり」の方が感じとして優り「途惑わせ」より「とまどわせ」がイメージとしてピタリくるのは何か、ということである。

また〃ことば選び〃〃字選び〃は漢字を仮名に換えればいいということではなく、例えば「緑」と書く場合、「翠」とする場合、さらに「碧」と表わす場合もあり、それ相応に句のイメージにかなったことば、ないしは字を選ばねばならないと思う。とくに日本人として幸せなことは外国に比べ数多くの意味深い字とことばが豊富にある

花地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋選

日曜出勤子らの不平を背なに聞く　智子
ちょっとちょっと呼んで重大な話する　あいき
不平みな態度になって反抗期　君子
働かぬ奴ほど不平云う職場　好一
不平もう影をひそめた試歩の朝　静歩
老妻に子供のように扱われ　儀一
頭数揃える会へ狩り出され　形水
植木屋のお歳暮今年も松竹梅　古方
子は不平親にあかさず友に告げ　綾女
丹精なヒゲが嫌味を買う若さ　柳信
頭数ざっと数えて通夜の席　水京
療養で植木作りを覚えて来　喜風
頭数そろえて野党負けていず　頂留子
丹精に水やりすぎて根が腐り　静馬
身軽うに母は行きます孫抱きに　一栄
手打ちした示談の肩が軽くなり　牧人
標札を出して老妻職があり　悦郎
闘病のふとんが軽い嘘が出る　新之助
始めから首相は軽くかわす肚　圭井堂
不平ひとつ言わないだけに気を使い　庸佑
丹精に育てた自慢春の彩　酔々
丹精の一生機（はた）がした猫背　章雅
丹精の料理無造作に食われ　好郎
ふえてゆく肩書老妻知らん顔　莢水
芸なしも入れて芸者の頭数　文秋
植木市なじんだ土を根にかぶせ　肖二
ばかに成れる老妻茶の間の主です　千梢
老妻と喋ることなきティルーム　恒明
妻ある日荷物まとめている不平　美代
水打てば一段映える植木市　誓二
身勝手を叱ってくれるのが不平　小松園
下積みの不平がストに火をつける　滋雀

川柳ささやま

河原みのる報

恩給もなく農耕に六十年　緑村
恩給までいま一ト息のあえぎ　新水
晩酌が効いて恩給亡国論　近江
恩給日盆栽手伝う孫の智恵　蕪石
恩給をどっさりためて逝かはった　村雨
顔のしわ恩給の年輪刻みこみ　拓
恩給にたどりついたら中風が出　可住
断絶へ気ままと頑固が同居する　よしの
美しく育ち気ままな母に似る　初音
御病気は気ままですよと医者云わず　越山
気ままにしてまんねんと姥は笑み　竹堂
嫁が来てバター度たび胃をおどし　素水
腹の虫バターの匂い待ち切れず　枝葉
曲り角へ来た日本に指導者がいない　英断
角かくし気まま詫びてる顔となり　百合子
真相は耳朶をくすぐる私語となり　掬水
開かない花の真相まだぬくめ　雅佐女
真相は部屋の鏡が知っていた　無聖
これとあれだけは明かさず死んでいと　みのる
失恋の男真相にはふれず　ゆきお
傷を負う友あり真相口にせず　とおる
真相はどうでもよろし週刊誌　青峰
何事だそいつを早よう云わんかい　無鬼

八尾菜の花川柳会

飯田悦郎報

噛み合わぬ意見へ酒を運ばせる　静馬
今日の日に耐えた思いを噛み殺し　飛鳥
爪噛んで女の性は思いつめ　誓二
ガムを噛む娘明治の気に入らず　連夢
恐わがってやれば怪獣笑いだし　吉則
酔うた眼へ怪獣が戸を開ける　鬼遊
一人っ子犬と牛乳分けて飲み　牧人
牛乳を飲んで青年髭剃らず　悦郎
牛乳も飲めなくなったとウナを打つ　綾女
ときめいた胸を男の身に預け　肖二
ときめきをかくす鏡のむきを替え　葉子
ときめきに地球を抱いている野心　岳人
ときめきを母に与えた娘の授賞　鶴声
畳まで出したら向いの火が消えた　柳太
一間には畳を敷いて親日家　酔々
言い憎い話畳にケバがない　美代
断ち切れぬ思慕を畳へ指で書き　儀一
廃屋の畳魂が坐ってた　河産
妻制す毒それなりの匙加減　凡九郎
毒ですと二杯目恐いママになり　喜風
毒きのこ森の小人が出て来そう　栞
牛乳が来て新聞が来て掃き出され　莢水

堺・若芽合同川柳会（堺市）

和海草春報

魚屋の呼び声ほどは客の来ず　柳信
素晴しい未来が僕を呼ぶ君を呼ぶ　鶴丸

嘘つきと知らずに惚れたくされ縁　儀一
朱い嘘リンゴは皮ごとかじるもの　夢成
ホステスのうそグラスに注ぎこぼし　左久良
素人と判り言葉を借りてくる　葵水
素人向国会斗争猿芝居　淳司
素人にはさっぱり判らぬデノミ論　誓二
かくし芸素人ばなれとまた一杯　藤持
素人に見せる苦労してくるわを出　徳子
ホステスの素人くささがした指名　笑痴
素人のアンマで肩がよけいこり　柳影
素人にしてはうまいと利用され　宏子
素人売り断り書の下で売り　静馬
物云えぬ子の敏感な目の動き　清涼
敏感な妻にさとられまい苦労　摩天郎
恋をしてから敏感な身のこなし　天笑
敏感にキャッチされた日の会話　つき子
内妻ともうアパートは知っており　好郎

まるべに川柳会（大阪市）　村田瓢太報

見なれないすいがらもあり春の宵　貞
日雇いが働いている花吹雪　節子
幾たびかとどまって見た長い道　寿子
桜花庭に咲けども主人亡し　星斗
快復の身をいたわりて大地踏む　慶子
猫さえもめばえかいやに落ちつかず　美枝子
好きな人の笑顔に会った日の平和　一世
事故つづき顔を見る迄手を合わせ　茂児
ご機嫌のよい間だけ孫を借り　瓢太
独酌でもよし春雨聞きながら　好郎

どんぐり川柳会（大阪市）　谷垣史好報

おねじめねじと仲のよいいとなみ　いわを
養老院花のネオンを遠く見る　酔々
ぎりぎりの女片道切符買う　鬼遊
廻転椅子ネジのゆるみに気がつかず　好郎
一本のネジがゆるんでから落目　比呂路
制限の年齢ぎりぎりで就職し　勝恵
愛の終りをネオンが見つめている夜更け　真砂
遊ぶ灯に驕る知性のうす汚れ　修史
ぎりぎりまでさがる車輪と笛が合い　孝子
ネオン街明治生れにきつすぎる　紀水
ネオンの海へ男の屑を捨てに行く　小松園
空っぽの頭で朝のネジを巻く　悦郎
ぎりぎりの線まで媚びる夜の蝶　痴亭
ほめてたらお茶のあとから出たお菓子　岳人
ぎりぎりの暮しにもある上中下　吸江
ぎりぎりにかければ電車も遅れて来　之保
妻という内助のネジに支えられ　喜風
ぎりぎりまで耐える嫉妬にトゲがたち　弥生
お茶受けを誉めて出がらしだまっとき　儀一
留守番の子が出すお茶の熱すぎる　史好

和歌山七面句会　三幸報

人形の兵隊休めと言うてやりたいな　和美
スリッパを眺めて見合もう終り　凡夫
またしても布団人形を背負う孫　城石
園児来てスリッパ鳴らす大人の会　光治
スリッパから遠慮している無心客　政夫
仕合せは孫を玩具にして昏れる　芳重
武者人形皆それぞれの力みよう　淳子
スリッパの数程患者来て居らず　勇次
子供の日父が玩具のラッパ吹く　其夕
人形師かくしきれない我が心　富子
スリッパの数で肴の準備する　昭伸
めじろ鳴く日に飛んだ竹とんぼ　酔々
ぶっちゃけた玩具の中の古時計　陽一
片方のスリッパ脱げたメロドラマ　三幸

川柳東大阪句会　竹中肖二報

甘い夢今日実現のハネムーン　大丘子
桃色のカーテン甘い城つくる　鬼遊
信じます甘いと批判されようが　古方
陸橋の下にすすけた鳩が住み　肖二
鬼瓦にらみがきかぬ鳩の群　秀信
あきらめて逃した鳩が家に居る　秀麿
神の留守賽銭箱に止る鳩　悦郎
熊が出る噂麓で引き返えし　湖風
山麓のこんな里にも自家用車　豊三
山麓で猿のでっかい瞳と出合い　儀一
消火器も置かず山麓ひそと住み　白洋
こけた子が後姿へ勝気見せ　鎮彦
黒板に向う教師の背なの老い　竹充
後姿が尾行を知った足になり　文秋
後姿へヒソヒソ声が追う　三十四
後姿母の内股古風めき　喜風
後姿見送る視線ぼけてゆき　誓二
明日も逢う姿が消えた戸に別れ　清禄
虚勢マザマザ後姿の肩の線　凡九郎
受験する後姿に手を合せ　竜之介
受賞する後姿にある孤影　新之助
嫁の荷の奥にかくしたマスコット　綾女
マスコット変り相手が又変り　柳宏子
体臭がしみ込んでいるマスコット　思月
雑種でも俺の可愛いいマスコット　金愚
ねんねにも一緒汚れたマスコット　和子
マスコット初荷の窓へゆれ続け　静歩
マスコット揃えてコンビたしかめる　与呂志

マイカーにママには言えぬマスコット　葵　水
切々の母の手紙がマスコット　一　栄
迷い子の握りしめてるマスコット　酔　々
人形きちんと座らせ少女旅に出る　万　的

川柳大阪　児島与呂志報

熱燗で遠慮の膳を攻めに来る　本蔭棒
年寄りの冷水でした息が切れ　呑歩利
不安のない身体ですよとレントゲン　誓　二
合格のしらせに二浪の不安とび　鴨　吉
停年へ不安の種が一つふえ　甫久路
権力を示すお城に金子が要り　蟻香糖
笑うてもまだ笑ってるお年頃　武　松
血圧を又上げに来た督促状　凡　々
障子越しの笑いいいことありそうな　胡　蝶
失恋のくやし涙で指を噛み　晃　山
救急車不安を乗せたまま走り　喜　酔
番茶の味賞めている峠茶屋　笑　風
味などはまだまだ新婚一カ月　三十四　敏
久しぶり舌が知ってる母の味　
不安気に受けた試験が合格し　太　峰
せかせかと不安打ち消す煙草吸い　至　峰
ニュース見て不安な顔が寄って来る　徹　舟
大阪の味しみこんでいるのれん　重　人
ストレスを飛ばすつもりかハイゲーム　秀　峰
ゆれているピンを無情につまみ上げ　漁　人
自信あり不安もあって試運転　鹿　童
我が不安親たちだけがかけめぐり　茂　坊
春近い我が家の庭に小さな芽　戸　無
親なればこその不安を邪魔がられ　孤　舟
不安がる父へ片眼つむったつのかくし　徳　松
ガーターを隣のミニの故にする　小　星
ボウリングブームささえるミニ姿　まさじ
ストライク出す度指をVサイン　安　平
ストライク倒したピンが夢に出る　晴　道
レジャー熱わが家素通りして昼寝　楽　々
レジャーぼけばかりが目立つ月曜日　金　太
山ザルもレジャーブームに芸覚え　道　子
舶来のレジャーが山を裸にし　東　風
出不精なやめレジャー持て余し　三　吉
人間の回復余暇の汗ながし　力　泉
ようぼやく奴だと自分もぼやいてい　京　介
知らぬ間にぼやき話を一人占め　六　三
ぼやきつつ一生を暮すへそ曲り　風来坊
又の日を指からませて別れゆく　天　守
川柳を指折り曲げて不作なり　幽　泉
幼稚園指で数をば数えてる　二天坊
気にかかるあの娘の可愛いくすり指　漁　舟
恋の指からんで嬉し遠まわり　洛　酔
説明が欲しい洋画の見学者　早乙女
笑い合う夫婦にかげりの無い平和　与呂志

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻　圭水報

社員章どん底の頃知っている　八　郎
会員章変えて背広の忙しい　清　涼
制服のまだ其上に社員章　貴　山
仲人を安心させた社員章　和　郎
逮捕者が出てから隠す社員章　摩天郎
定年を惜しまれはずす社員章　誓　二
社員章パックの御蔭もう忘れ　宏　子
社員章のにらみがつけでよいと言う　圭　水

OSK川柳会　大坂形水報

寒さにも耐えてこの身の花開く　泉　水
新人のいつまでつづくその気持ち　松　尾
実力を制す人気の新人王　大　山
来てみればここら新婚さんコース　青　谷
甲子園チームワークで夢開く　山　下
新人の気持にかえりほうき持つ　中　野
人の世のみにくさを知る新入社　川　上
憂うつを打ち消すための一人旅　豊　博
トンネルを出るや眩しい視野開く　亜　成
新入社ニューモードでやってくる　仙　夢
ひとり旅自分自身を凝視める気　聖　地
金の卵遠慮しながら叱りつけ　創　三
説明は団体さんの横で聞き　一　扇
新人は年功序列に背をむける　貞　夫
かたくなな心を開く子の笑顔　神　田
実力の世へ因習の門開く　形　水
発車迄時間が余るサウナ風呂　入　仙
新人のくせにと既に負けており　好　郎

城北明朗句会　川口弘生報

ただ合掌して倖せな初詣　満津子
初詣賭けたみくじを木にくくり　進
これがあのお転婆娘の初姿　賛　平
初日の出感激うすいビルの町　弘　生
初便り梅一輪も封じこめ　シ　ゲ
初詣でおしゃれと欲の人の波　繁　子
うぶだった時もあったと皺を撫で　濁　水
さそわれていやともいえぬ初参り　生　仏
初産婦は産むは易しを聞きあきる　春　巣
物価高買物籠にぐちを入れ　隼　人
軍神がグァムから帰り説教し　太茂津
切れ目なく値上げの津波やって来る　秀　村
いつの世も世渡り下手はお人好し　ますゑ
酒好きの父への土産特級酒　三　平

下手の横好き寒鮒へ震えて来　三十四　大矢十郎報

川柳しんぐう

仲人口聞くと見るとの正反対　良平
知らぬやつほど偉そうに反対し　翠楊
反対もあるが見事なゴールイン　とよ子
ときたまの反対うれし新世帯　義孝
先生のスト見習った子が育ち　千寿子
性格がまるで反対でも仲間　順子
親と子は反対言って意地を張り　光代
反対と要求だけの列が行く　まさ子
反対の顔で座っている会議　久司
店員の顔見に通う百貨店　純滋
見習いの我が娘を覗く百貨店　暢
弁当で妻の相場の上げ下り　計
健康と思うもゆらぐレントゲン　清定
レントゲン必要なほど失恋し　つる枝
レントゲン浮気の虫を覗きたい　文代
レントゲン結果へ悪い予感する　晴美
人間てこんなものかとレントゲン　富子
駅弁を買いたし汽車は通過する　良造
弁当で家の経済よくわかり　君代
弁当を枕に地下足袋ひる寝する　ふみよ
弁当へ夢を詰め込む毎日で　千宜
弁当を早く食べたい三限目　章代
野仏に一箸供えて農夫の昼　雀踊子
遅参して反対さけぶ会議ずれ　十郎

川柳たけはら　森井菁居報

苦しみのさ中を覚めるプロ意識　酉合
見送ってあげたい人に見送られ　かつ子
噂ほど儲けていない申告書　郷愁
床柱背に元旦をあらたまる　鬼焼
ルージュ引く恋の匂いをばらまいて　英詩
見送ってからも仲人気にかかり　路秋
子が育つ育つボーナスには無縁　清峰
日の丸をバックに撮るも三カ日　泉
マスクはずして風邪気味でザーマスの　笑子
ゲレンデへ心がとんだ今朝の雪　文明
弁解になるから涙は流さない　浄美
むらさきのふとんにすまぬ娘を想う　雅鳳
寒行をしている列にもいるマスク　康宏
子の好きなチャンネル誰も逆らわず　そのみ
煙突はいいな苦悶をはき出して　菁居
受験中のぞけばあどけない寝顔　春子
バンドゆるめて遠慮のないお客　貞子
反論は無駄と知る日の酒苦し　美佐雄
太陽の匂いが好きで乾すふとん　春昇
叱られに行く身の振りを整える　扇水
過去みんな語り明かせぬ夜であり　千百合
熱の日のすべて見上げるものばかり　政己
元旦の机上とにかく開けはなち　不朽
仕事仕事男の逃げ道かも知れず　蘭幸
なによりも孫の重みを抱いて初春　房子
寒の水漬物洗う妻のいて　静水
控え目に暮して平和な雲が焼け　松緑
唇の温さ化粧を落しても　葵水
床の間が物置きとなり独り者　天石庵
初雪のいのち短い陽の高さ　清太郎
デパートで買い味気ない鏡餅　マスエ
初孫へばあちゃんもんだ餅が着き　静雨
消えそうな炭火へ一吹き生き返り　敏夫

駒つなぎ句会　岸　南柳報

人不足二階は何時も準備中　和子
食い違い狩立てた娘に噛みつかれ　儀一
やく事を知らぬ女と共に住み　柳信
胸の線までは女でない男　一点子
男かも知れぬ女に声をかけ　金三
赤軍もマル秘も破れは女から　いわを
Gパンのヒップやっぽり女なり　良平
マッチする女不幸な爪の色　順三
花一輪花らしさをとりもどし　宏子
ネクタイの柄を女の目でえらび　育園
集会の紅一点に女が咲き　点心坊
靴ならしミニスカートで巫女帰える　多津緒
惚れている弱みへ女待たされる　岳人
心の貧かくす女の厚化粧　弥栄子
もの想う女にいちごうれている　美代
人の子を産んだ女に抱きつかれ　小松園
世話役が準備に汗と恥をかき　南柳

南大阪川柳会　金井文秋報

腹芸は味方を敵と見て話し　柳志
ひと騒ぎさせて孫らの風呂が済み　葵水
押入れで騒ぎをよそに寝ていた子　滋雀
味方にも敵にもならぬ母がいる　あいき
思い切って嫁げば似合うて来た夫婦　悦郎
味方より敵が私の支えです　凡九郎
銭だけが味方だと云う処世感　誓二
手伝いの母がなじめぬインテリア　新之助
静脈の青い女の抱く孤独　酔々
野次馬に何んにもならぬ味方され　儀一
脈ないと見たカタログ持って去に　文秋
かかる時姑に味方して納め　智子
騒ぐだけ騒ぎ恐縮して帰り　柳宏子

（以下次号）

西出一栄句集「ねっくれす」　六〇〇円
西尾　栞句集「水　鶏　笛」　六五〇円
「秀句鑑賞と梅志句集」　六〇〇円
若本多久志句集「老いの坂」　五六〇円
「十　九　平　句　集」　六〇〇円
以上送料共

路郎忌句会

日時　七月七日（金）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題
柳話　中島生々庵
「ヒント」　菊沢小松園選
「肌」　若本多久志選
「優越感」　西尾栞選
「旅人」　北川春巣選

席題　三題　当日発表
会費　二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社

8月の兼題　「原爆追憶」「ベール」「貝」「昼寝」

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞選
近作柳樽（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「過　密」遠山可住選
「ネクタイ」植村客遊子選
「長　屋」木村水洞選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞選
近作柳樽（10句）菊沢小松園選
課題吟（各題5句以内）
「急　所」越智一水選
「表向き」田中蛙眠子選
「手ぐすね」小川恒明選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

募集

定価　百八十円（送料十六円）
半年分　千百七十円（送料共）
一年分　二千二百円（送料共）
昭和四十七年六月二十五日印刷
昭和四十七年七月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二一
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★同人の三分の一は路郎先生を知らぬ人たちである。★これを時の流れというのだろうが――作品はみな知っているが、どんな方だったか？　そこが知りたいようである。そういえば、路郎先生の映像をハッキリえがきだした文章をまだ本誌に発表していなかったようである。

★若い同人諸氏は、路郎先生の選者としての第一人者であったことを先輩から聞かされている。

★ぼくも、そんな質問をよくうけるが、「それでメシを食っていられたのだよ」と答えることにしている。

★朝から寝るまで川柳一本で生活していた方である。選がまずくては生活ができない――プロである。

★このごろの歌手のようにプロよりうまいアマが出てくるようでは、歌謡界そのものがどうかしているのである。

★陳腐な例だが、ジャイアンツの長島選手が、立教からプロの世界へはいってきた初陣に、当時の金田投手が4打席4三振させたことはプロの根性を見せたものだ。

★趣味というものは、アマであることがいちばんたのしい。ゆめゆめプロなどになるものではない。

★麻生薮乃先生が雑誌をやめられたとき「何十年かぶりでホッとした」と述懐さもいる。答は簡単、買い手がないのである。つまるところ〝変身か〟〝自殺か〟というのがオチである。

★作家深沢七郎氏は〝ラブミー農場〟や〝今川焼き〟屋を営んだが、趣味でやるから楽しいと言っている。

★だから、日くじらたてずにたのしく川柳をしましょうや。

★同人名簿をお送りしました。（不二田一三夫）

葉子コーナー

▼生々庵先生ご夫妻のアメリカみやげを私もいただきました。香水入りのボールペンです。

▼小石奥様いわく、ラブレター用なんですって。匂う文字で恋を書く――スバラシイですね。

★吟社だけではないが、集団の指導者というものは、たとえば川柳の場合、一人前の作家として、あまりきびしくムチをふるうとみなやめてしまう。

★厳選の連続で毎月ボツか一句ぐらいより作品が出なかったらどうだろうか。大半の人は他社へ移ってしまうことはまず間違いはないだろう。これがアマの世界である。

★漫才の台本を十年以上も勉強しながら、いまだに一本もモノにならない人が何人いるかわからない。プロへの道は想像以上にきびしいものだ。

★作家の肩書きを持ちながら、これまた十年以上一本も作品を発表していない人れたことをおもいだす。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年六月二十五日 印刷
昭和四十七年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五四二号

川柳塔 七月号

定価 百八十円（送料十六円）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

〈ホテル・旅館〉

◇白浜温泉
国際観光旅館 朝日
国際観光ホテル ホテルパシフィック

◇勝浦温泉
国際観光旅館 中の島

◇湯峰温泉
国際観光旅館 湯の峯荘

◇新和歌浦
国際観光旅館 萬波

◇徳島鳴門
国際観光旅館 鳴門
国際観光旅館 鳴門公園ホテル

◇紀北橋本
観光旅館 紀の川苑

◇泉南淡輪海岸
観光旅館 淡の輪苑

◇大阪なんば ホテル南海

お問合せ・お申込み 南海交通社
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06—(631)—0222

南海電鉄